

Defining the South's Second Reconstruction: The Historiography of the Civil Rights Movement in America\*  
(アメリカ南部公民権運動は如何に綴られてきたのか: ヒストリオグラフィー [Historiography] の文脈に観る黒人公民権と将来的研究課題)

Yasuhiro Katagiri\*\*

**SUMMARY:** Though there is no quarrel that the era of the civil rights movement is one of the most defining moments in American history, little has been written—notably, by Japanese historians—on the historiography of the American South's Second Reconstruction. Filling in this scholarly void, this article describes how historians, scholars in other disciplines, journalists, and nonfiction writers have told the histories of the civil rights movement, and it identifies some of the most influential writers who have defined and redefined the movement's days. In so doing, the article also points out some inadequate aspects that the civil rights histories have so far manifested—namely, the general lack of investigating the movement through the eyes of the defiant white South, the oftentimes blindly followed norm that the movement itself and its leaders were always flawless and morally righteous, and the precarious interpretations as to when the movement began and, if ever, ended.

---

\* 本論文は、2004年7月15日に、上智大学アメリカ・カナダ研究所主催のアメリカ研究コロキウムにおいての発表原稿に大幅な加筆を施したものである。

\*\* 片桐 康宏 Associate Professor of American History and Government, Department of American Civilization, School of Letters, Tokai University, Kanagawa, Japan.

## はじめに 「動産」から「人間」へ、そして「市民」から「二級市民」へ

アメリカがその誕生の時点から もっと正確にはイギリス領植民地であった時代から 自らに内包させた「原罪」(original sin)として、黒人奴隷制とネイティブ・アメリカンの排除、抹殺をあげることが出来よう。1861年4月からちょうど4年間にわたり、北部諸州と南部諸州との間で戦われた南北戦争(Civil War)は、まさにこの「原罪」としての奴隷制をめぐる内戦であった。大陸国家化へのプロセスの中であって、西方に広がる新領地において奴隷制を拡散させるか否か、さらにはその後のアメリカが、奴隷制国家としての歩みを続けていくべきなのか、それとも奴隷制という非人道的な制度を廃止した、いわば「新生国家」としての再出発を切っていくべきなのかという重大な問題が、この南北戦争の行く末にかかっていたのである。<sup>1</sup>

西部領地への奴隷制不拡散を党の綱領として定めた共和党のエイブラハム・リンカーン(Abraham Lincoln)が、大統領に就任するに及んで、南北戦争勃発と相前後する形で、南部11州が連邦、すなわちアメリカ合衆国から脱退し、自らの政府としての「南部連合」(Confederate States of America、略してCSA)を結成する。かつてミシシッピ州選出連邦上院議員を務めたジェファソン・デービス(Jefferson Davis)を大統領に擁立し、連合憲法において奴隷制の存続を明確に謳った「南部連合」ではあったが、当時のアメリカ全人口の約2パーセントにあたる、少なくとも62万人の戦死者をもたらした南北戦争は、結果として北軍、つまりは連邦軍の勝利に終わる。<sup>2</sup>

黒人奴隷の地位をめぐるのは、戦時中の1863年1月に、リンカーン大統領により「奴隷解放宣言」(Emancipation Proclamation)が公布される。しかしこの宣言は、南部プランター達が所有する、法的、憲法的には「私有財産」であるところの奴隷を一方的に解放せよとする点において、明らかに財産権の大いなる侵害であった。つまりは、アメリカ革命史家、斎藤眞の言葉を借りるのであれば、アメリカ「共和国からの絶対的疎外」の中に置かれた黒人奴隷は、1787年の合衆国憲法制定時より、所有者の意思に翻弄される「動産」に過ぎなかったのである。そこでリンカーンは、連邦軍の「最高司令官」(commander-in-chief)としての大統領が、戦時における「必要な軍事措置」(“necessary war measure”)として すなわち今日的な「戦争権限」(war power)の行使者として 奴隷解放を行うとしたのであったが、そのため理論的には戦争がいったん終結してし

まえば、宣言自体の効力が失われてしまうこととなる。また、宣言布告の対象となっていたのが、合衆国政府に対し「武力反乱」(“armed rebellion”)を起こしている南部11州に限られていたため、戦時中連邦側に留まりながらも奴隷制を容認している諸州にいる黒人の地位が、戦争終結後に非常にあいまいなものとなる。<sup>3</sup>

1865年4月の南北戦争終結後、戦争に勝利した北部の共和党急進派(Radical Republicans)主導のもと、旧「南部連合」を構成した諸州は軍事占領され、南部再建期(Reconstruction)の時代を迎えることとなる。「動産」なのか、はたまた「人間」なのかという微妙な立場で揺れ動く黒人の地位保全のために、この南部再建期において、3つの重要な修正条項が合衆国憲法に追加される。1865年に制定された憲法修正第13条において、合衆国全土、またはその管轄に属する全ての地域での奴隷制の禁止が謳われ、それから3年後の1868年制定の修正第14条では、かつて奴隷の地位にあった黒人達も、合衆国及び居住する州の「市民」であり、いかなる州もその「市民」に対して、「法の下での平等」(“equal protection of the laws”)を拒んではならないとされた。次いで1870年に憲法に加わった修正第15条が、政治過程への参加権、つまりは投票権を、旧奴隷である黒人達に付与したのであった。<sup>4</sup>

有権者の増大と、それに伴う公職者の誕生により、南部黒人による政治的進出が進む一方において、今や法的、憲法的にも「動産」から「人間」となり、かつ「市民」としての地位を与えられた旧奴隷達による社会的、政治的自立を快しとしない南部白人により、「クー・クラックス・クラン」(Ku Klux Klan)が結成され、白人優越主義者によるテロ行為が南部社会を席捲していく。南部再建期がその11年目を迎えた1876年、北部共和党候補のルーサーフォード・ヘイズ(Rutherford Hayes)と、南部民主党候補のサミュエル・ティルデン(Samuel Tilden)との間で、大統領選挙が戦われるが、選挙に不正があったとの異議申し立てを経て、両党の間に政治的妥協が成立する。「1877年の妥協」(Compromise of 1877)と称されるこの妥協により、民主党が共和党候補ヘイズの大統領職への当選を認める代わりに、共和党は南部からの連邦軍の撤退に同意したのである。こうして、北部による南部からの撤退に伴い、12年間に及んだ南部再建期は、唐突なまでの幕引きを迎えたのであった。<sup>5</sup>

再建期後の南部にあって、北部共和党政治家が約束した「40エーカーの土地と1頭のラバ」(“forty acres and a mule”)を、結果として得ることの出来なかった南部黒人の大半は、やがて困窮に喘ぐ「シェアークロPPER」(sharecropper)すなわち「分作小作人」の地位に貶められていく。

南部再建期に制定された憲法修正第15条により、投票権を獲得した黒人ではあったが、白人貧農と黒人との間の政治的連帯を恐れた南部白人エリート層は、「白人の党」(“white man’s party”)としての民主党への結束を図り、その結果、次第に黒人の投票権剥奪に着手するようになった。ただし、修正第15条の存在のために、今や人種、肌の色を理由とした、あからさまな形での参政権の制限は不可能であるために、人頭税 (poll tax) の納付、識字テスト (literacy test) さらには憲法解釈テスト (understanding test) 等の手段により、南部白人政治家達は、貧しく、教育程度の低い黒人を、政治過程から排除していく。白人によるこうした組織的な黒人投票権剥奪の動きは、1890年にまずミシシッピ州で始まり、これは「ミシシッピ・プラン」(Mississippi Plan)と呼ばれる。1908年にジョージア州で採用されるに至り、南部諸州におけるその「完成」を見るのである。<sup>6</sup>

黒人投票権剥奪とほぼ同時進行的に、再建期後の南部諸州においては、社会生活の隅々、誕生する病院から始まり、公共交通機関、公立学校、宿泊施設、レストラン、映画館、公園、そして死後の墓地に至るまでに及び、人種分離制度が慣習化されていく。この点においても、憲法修正第14条の中に「法の下での平等」条項があるために、当初南部諸州は、それに真っ向から抵触するような形での、人種分離制度の立法化を出来ずにいた。しかしまもなく、アメリカによる「白人文明の優越性」が、海外領土の獲得という形をとって顕在化した世紀転換期の1896年に下された、連邦最高裁判所による「プレッシー判決」(*Plessy v. Ferguson*) を契機として、もはや「慣習化」ではなく「法制化」された人種分離制度「ジム・クロウ」(Jim Crow) 制度が確立されていく。ルイジアナ州を走る州内鉄道客車における、人種分離制度の合憲性を争ったこの裁判において、連邦最高裁は、「分離しても平等」(“separate but equal”) ならば良しとする原則を打ち立て、まさにそれは南部諸州にとって、肌の色による分離を合法化していくための、すなわち「市民」になった黒人を、今度は「二級市民」の地位に貶めるための、大きな後ろ盾となったのである。<sup>7</sup>

しかし、連邦最高裁による「プレッシー判決」以後、現実には南部白人が行ったことは、「分離すれども平等」原則の下での人種分離政策の運用ではなく、むしろ「分離してかつ不平等」(“separate and unequal”) の現実を黒人に押し付けることであり、それは公教育の分野における、白人校と黒人校との間の教育水準の大きな隔たりにも、明々白々に現れていた。第二次世界大戦後、「民主主義の偉大な兵器廠」(“great arsenal of democracy”) としてのアメリカによる一挙一動が、様々な意味において国際的にも注目をされる中、半世紀前の自らの判断を覆し、いわばアメ

リカの「良心」を代弁する形で、1954年5月に連邦最高裁が「ブラウン判決」(*Brown v. Board of Education*)を下す。法律による公立学校における人種分離教育制度を、憲法修正第14条の「法の下での平等」原則違反としたこの画期的な判決は、直接的には公教育分野における人種別学制度の撤廃を促すものではあったが、同時にこの「ブラウン判決」は、その直後に続く南部における公民権運動 すなわち南部黒人による一種の社会的、政治的「革命」のいわば「起爆剤」となる。<sup>8</sup>

連邦司法部による黒人公民権擁護が明確となった翌年、かつて「南部連合」の最初の首都が置かれたアラバマ州都モントゴメリーにおいて、南部黒人による最初の大規模な「非暴力、直接行動」(nonviolent, direct action)が展開される。1955年12月に始まるこの「モントゴメリー・バス・ボイコット運動」(Montgomery Bus Boycott)において、その後の公民権運動を率いる一大牽引役となる、マーティン・ルーサー・キング・ジュニア(Martin Luther King, Jr.)牧師の登場を見るのである。

一年以上にわたって闘われた「バス・ボイコット運動」の結果、公共交通機関における人種分離制度が、連邦最高裁により違憲とされる一方、「ブラウン判決」がそもそも意図した、公教育制度における人種別学制度の撤廃は、遅々として進まない状況にあった。1957年秋には、周辺南部(Peripheral South)の一州であるアーカンソー州において、公立高校における白人と黒人の統合教育への移行をめぐり、州政府とドワイト・D・アイゼンハワー(Dwight D. Eisenhower)大統領政権下の連邦政府との間で、連邦軍を動員しての衝突が起こる。州都リトル・ロックにあった「セントラル高校」(Central High School)を舞台としたこの「リトル・ロック事件」(Little Rock crisis)の重要性は、南部再建期以降、連邦政府が具体的には、連邦政府の司法部に続く形で行政府が 軍隊を動員してまでも、黒人の公民権擁護にまわった初めての事例である点に認められる。

「モントゴメリー・バス・ボイコット運動」を切っ掛けとして、公民権運動推進上の思想的基盤ともなった「非暴力、直接行動」が、ランチ・カウンター等における「シット・イン」(sit-in)つまりは「座り込み運動」の形をとって南部各地に飛び火する中で、深南部(Deep South)に位置し、自他共に「人種差別の砦」を認めたミシシッピ州において、「ミシシッピ大学事件」(Ole Miss crisis)が発生する。1962年秋、このミシシッピ大学ヘジェームズ・H・メレディス(James H. Meredith)という名の一人の学生が、初の黒人学生としての入学を果たすのであるが、これはなにもメレディス本人の勇気のみによって果たせたものではなく、時のジョン・F・ケネディー(John F. Kennedy)大統領によるキャンパス

への連邦軍投入、そして二つの尊い人命を失った結果、可能となったのである。

連邦軍に象徴される連邦政府の圧倒的な力を前に、後退を余儀なくされたミシシッピ州であったが、翌1963年にはミシシッピ州の隣州、アラバマ州において、キング牧師に率いられた「バーミンガム闘争」( Birmingham Confrontation )や「アラバマ大学事件」( University of Alabama crisis )が、立て続けに起こる。前者においては、公民権獲得を目指し「非暴力」で行進を続ける黒人少年、少女の列に、警察犬が放たれ、消防署の消火ホースにより高圧の放水が浴びせられる様が、マス・メディアを介して全米、そして世界中を駆け巡り、ついにケネディー政権は、連邦議会に対する公民権法の制定を促すのであった。

1963年8月に、20万人もの参加者を集めて開催された「ワシントン大行進」( March on Washington )では、キング牧師による「私には夢がある」( “I Have a Dream” )と題する有名な演説が読みあげられ、公民権運動はそれまでで最大の高揚期を迎えた。その事実と並行する形で、公民権運動に抵抗する側の南部白人による抵抗運動も、その激しさを増していった。黒人の投票権登録推進を目指した、1964年の「ミシシッピ夏期計画」( Mississippi Freedom Summer Project )においては、3名の公民権運動家が、地元「クー・クラックス・クラン」メンバーにより惨殺される。ケネディー大統領亡き後、副大統領から大統領へ昇格したリンドン・B・ジョンソン( Lyndon B. Johnson )のリーダーシップの下、この同じ夏には、「1964年公民権法」( Civil Rights Act of 1964 )が連邦議会で制定される。人種分離教育制度を温存し続けている学校区に対する、連邦政府資金援助の凍結や、人種、肌の色による分離、差別を、私的な宿泊施設、レストラン等に対しても禁止をしたこの「公民権法」の重要性は、その適用範囲の広範さのみならず、同法の制定に至って、やっこのことで「人民の代表の場」であるところの議会、すなわち立法府が、黒人の公民権擁護を確認したことにある。

「1964年公民権法」制定後、公民権運動の最大の目標が、真の意味での「公民権」獲得 つまりは政治過程への参加 へと変遷していく。再びキング牧師に率いられ、1965年春には、アラバマ州において投票権獲得を要求する行進 「セルマからモントゴメリーへの行進」( Selma to Montgomery March ) が行われ、同年8月、前年の「公民権法」制定に続く形で、「1965年投票権法」( Voting Rights Act of 1965 )が、連邦議会で制定される。

しかし、こうした「公民権法」、「投票権法」の制定とほぼ時を同じく

して、それまで公民権運動を支えてきた思想的支柱でもあったところの「非暴力」、そして「白人との共闘」という考え方に、疑義を呈する運動家が現われ、広義における「黒人の将来」なり、「黒人のコミュニティ」は、白人リベラル層に属する人々ではなしに、黒人自身により決定、もしくは管理、運営されるべきとする、いわゆる「ブラック・パワー」(Black Power)唱道の出現を導くことになる。1968年4月のテネシー州メンフィスにおけるキング牧師暗殺は、こうした公民権運動の分裂と共に、まさに同運動史における「一時期」の終焉を示すものであった。

## 1. 公民権運動史ヒストリオグラフィー(Historiography)の概観 研究者は如何に公民権運動を綴ってきたのか

公民権運動史ヒストリオグラフィーの出発点は、1960年代初頭に求められるが、当初この運動史叙述の担い手の中心となったのは、歴史家ではなく、むしろジャーナリスト、公民権活動家、そして歴史以外の分野に属する学者達であった。ニューヨーク・タイムズ(*New York Times*)紙記者、アンソニー・ルイス(Anthony Lewis)による、1964年刊行の*Portrait of a Decade*や、ジョージア州都アトランタに本部を置く公民権運動団体、「南部地域会議」(Southern Regional Council)の中心人物の一人であった、ベンジャミン・ミュース(Benjamin Muse)が同年に記した、*Ten Years of Prelude*などが、この運動史叙述初期における著作の代表例である。また、連邦司法府、特に南部に置かれた連邦地区裁判所判事達の苦悩を主題とした、政治学者のJ・W・ペルタソン(J. W. Peltason)による*Fifty-Eight Lonely Men*(1961年)や、社会学者のジェームズ・W・ヴァンダー・ザンデン(James W. Vander Zanden)の、*Race Relations in Transition*(1965年)も、この同時期に著わされた研究書である。<sup>9</sup>

ジャーナリストや公民権運動に直接かかわりのある人々が、いわば「現在進行形」の事象を追う一方において、歴史家に課せられる一大責務が、「過去の解釈」に努めることにありという事実に起因して、上述の如く、公民権運動史著述の分野においても、歴史家の登場が若干遅れることとなるが、1970年代に入ると、これらプロフェッショナル・ヒストリアンによる、運動史研究が進められるようになる。しかし、著述に携わった研究者の多くは、もっぱら自らが公民権運動に、活動家として参画していた人々であった。その代表格は、白人活動家として「全国黒人地位向上協会」(National Association for the Advancement of Colored People、略

して NAACP)、「人種平等会議」(Congress of Racial Equality、略して CORE)そして「学生非暴力調整委員会」(Student Nonviolent Coordinating Committee、略して SNCC)において公民権運動を支持してきた、オーガスト・マイヤー(August Meier)であり、「人種平等会議」による公民権闘争史を綴った *CORE* を、1973年に著わしている。また、歴史学者としての歩みを、ジョージア州アトランタにある黒人女子大学、スペルマン大学(Spelman College)で始めたハワード・ジン(Howard Zinn)も、マイヤーと同様に白人でありながらも、黒人公民権運動への深いかわりを持ち続けてきた歴史家である。「学生非暴力調整委員会」による運動へ参画していたジンは、自らが20世紀なかばにおける「新しき黒人解放者」(“New Abolitionists”)と称した同委員会の活動を通して、公民権運動史のナラティブを試みた。<sup>10</sup>

一方、歴史家が公民権運動史の「語り部」としての地位を次第に占めていく中であって、運動史ヒストリオグラフィーにおける、ノンフィクション作家やジャーナリストによる貢献の継続性を無視することは出来ない。連邦最高裁「ブラウン判決」から22年目を迎えた1976年、小説家、ジャーナリストであるリチャード・クルーガー(Richard Kluger)により、この「ブラウン判決」を題材とした800頁に及ぶ大著、*Simple Justice* が世に送り出される。続いて、クルーガーによる著作の刊行から5年後の1981年には、ジャック・バス(Jack Bass)が *Unlikely Heroes* を書き著わした。南部6州を管轄する連邦第5控訴裁判所を主題として取りあげた同書においてバスは、人種分離、差別制度に支えられた「南部の生活様式」(“southern way of life”)の中に身を置く自己と、合衆国憲法を擁護する立場にある連邦判事としての自己との間の相克、葛藤に苦悩する、南部出身白人法曹家の姿を鮮明に描き出した。<sup>11</sup>

このように、初期における公民権運動史研究は、ジャーナリスト、小説家、公民権運動活動家、そして歴史家による、いわば共同作業の賜物として、そのスタートを切ったのであったが、1981年になってやっと、プロフェッショナル・ヒストリアンの手による、本格的な公民権運動の通史(synthesis)が登場する。全7章立ての構成をとった *The Struggle for Black Equality, 1954-1980* において、著者のハーバード・シットコフ(Harvard Sitkoff)は、1954年の「ブラウン判決」から1957年の「リトル・ロック事件」に至るまでの「全国黒人地位向上協会」の活動、1955年の「モンゴメリー・バス・ボイコット運動」と「南部キリスト教指導者会議」(Southern Christian Leadership Conference、略して SCLC)設立に観られたキング牧師の役割、1960年に開始された「学生非暴力調整委員会」



主導による「座り込み運動」、「人種平等会議」が中心となって推し進められた1961年の「フリーダム・ライド運動」(Freedom Rides)、アラバマ州オルバニーとバーミングガムでの公民権闘争、1963年の「ワシントン大行進」、1964年の「ミシシッピー夏期計画」と「公民権法」の成立、翌1965年の「セルマからモントゴメリーへの行進」と「投票権法」の制定、そして1968年のキング牧師の暗殺と「ブラック・パワー」の出現等の出来事を、時空列的に取り扱った。<sup>12</sup>

歴史家シットコフによる研究書の登場に刺激を受ける形で、その後公民権運動通史の刊行が続く。1987年に出版されたホアン・ウィリアムズ (Juan Williams) の手による通史、*Eyes on the Prize*は、「全米公共放送網」(Public Broadcasting Service)が放映した同題のドキュメンタリー番組のための、コンパニオン・ブックとなる。また、1954年の「ブラウン判決」から1965年の「投票権法」制定に至るまでの公民権運動史を綴った歴史ジャーナリスト、テイラー・ブランチ (Taylor Branch) による2冊 *Parting the Waters* (1988年)と *Pillar of Fire* (1998年) は、特筆に値する。それぞれが1,000頁にも及ぶこれら大著においてブランチは、キング牧師の人物伝と、公民権運動史上における重要な出来事を織り交ぜる形で、運動通史をそれまでに見られなかった骨太さをもって、見事に描き出している。さらに、1990年に著わされた *Black, White, and Southern* において、南部史研究家のデイビッド・R・ゴールドフィールド (David R. Goldfield) は、第二次世界大戦後の南部における白人、黒人間の人種関係史を解釈する作業の中で、キング牧師による「非暴力、直接行動」に体現された、非打算的なキリスト教的「愛」、「アガペ」(agape) の思想と、そこから派生していった南部白人による「罪の贖(あがな)い」(redemption)と「和解」(reconciliation)を、公民権運動史解釈上のキーワードに据えたのである。なお、1980年代初頭に始まる、アメリカにおける公民権運動通史執筆の試みは、外国の南部史研究家、公民権運動史研究家にとっても、大いなる刺激をもたらすことになる。1997年には、オーストラリア人歴史家であるジョン・A・サルモンド (John A. Salmond) が、“*My Mind Set on Freedom*”を執筆する一方、英国の公民権運動史家アダム・フェアクロフ (Adam Fairclough) による野心的通史、*Better Day Coming* (2001年)が刊行される。<sup>13</sup>

こうした本格的な公民権運動通史の登場と共に、前出のオーガスト・マイヤーやハワード・ジンのような、いわゆる「インサイダー」歴史家ではなく、「アウトサイダー」歴史家による、公民権運動諸団体に関する研究も進展していく。クレイボーン・カーソン (Clayborne Carson) によ

り、1981年に刊行された*In Struggle*は、1960年代に「学生非暴力調整委員会」が辿った軌跡を追ったものである。また、1987年に前出の英国史家、アダム・フェアクロフによって著わされた*To Redeem the Soul of America*は、キング牧師を中心として設立された、「南部キリスト教指導者会議」の歴史と活動に関する克明な記録である。その一方において、主に法廷闘争を中心として20世紀の初頭より黒人公民権運動を率いてきた、「全国黒人地位向上協会」についての包括的研究書が、今日に至るまで存在していない。ただし、同協会の「法律擁護基金」(Legal Defense Fund)の主席弁護人として活躍をし、後に連邦最高裁判事を務めたサーグッド・マーシャル(Thurgood Marshall)や、1931年から1955年まで協会の事務局長を務めたウォルター・ホワイト(Walter White)等の、個人に関する人物伝的研究書は存在する。また、ホワイト、そして彼の後継者として1977年まで協会事務局長の座にあったロイ・ウィルキンズ(Roy Wilkins)は、両者共いずれも自叙伝*A Man Called White*(1948年)、および*Standing Fast*(1982年)を書き著わしている。<sup>14</sup>

「全国黒人地位向上協会」のマーシャル、ホワイト、そしてウィルキンズと並び、他のいわゆる「4大公民権運動団体」「人種平等会議」「学生非暴力調整委員会」「南部キリスト教指導者会議」および「全国都市同盟」(National Urban League、略してNUL)において、指導的立場に立った活動家による回想録や自伝、そしてこうした人々に関する人物伝も、1980年代後半を迎える頃になると、次々と世に送り出されるようになる。1985年には、「人種平等会議」議長を務めたジェームズ・ファーマー(James Farmer)による自叙伝、*Lay Bare the Heart*が出版される一方、1966年まで「学生非暴力調整委員会」委員長職にあり、後の1991年よりジョージア州選出連邦下院議員を務めているジョン・ルイス(John Lewis)により、1998年に公民権運動回想録、*Walking with the Wind*が執筆された。また、ルイスの後を受けて1966年に委員長に就任し、「ブラック・パワー」のスローガンの下、「学生非暴力調整委員会」を急進路線へと導いていったストークリー・カーマイケル(Stokely Carmichael)により、2003年に自叙伝としての*Ready for Revolution*が記され、さらには同委員会によるミシシッピ州での黒人投票権登録推進運動のリーダーを務めた、ロバート・P・モーゼス(Robert "Bob" P. Moses)については、*And Gently He Shall Lead Them*(1994年)と題する人物伝が、エリック・バーナー(Eric Burner)の手により刊行されている。<sup>15</sup>

「南部キリスト教指導者会議」のキング牧師については、前出のテイラー・ブランチャやアダム・フェアクロフによる代表的著作の他にも、デ

イビッド・J・ギャロー (David J. Garrow) による *Bearing the Cross* (1986年) を始めとして、本稿においては枚挙に暇の無いような数の人物伝的著作、ならびに論文が発表され続けている。同会議において、キング牧師の側近を務めたラルフ・D・アバナシー (Ralph D. Abernathy, Sr.) 牧師に関しては、1989年に自叙伝、*And the Walls Came Tumbling Down* が記されており、またアバナシーと同様にキング牧師の側近であり、後に南部再建期以降初の黒人連邦下院議員、国連大使、さらにはジョージア州アトランタ市長の要職を歴任した、アンドリュー・ヤング (Andrew Young) には、*An Easy Burden* と題された1996年出版の回想録がある。最後に、主に全米都市部における黒人の生活環境の改善や、権利擁護の推進を目的として、1911年に設立された「全国都市同盟」については、1961年に事務局長に就任したホイットニー・M・ヤング (Whitney M. Young) の人物伝が、デニス・D・デッカーソン (Dennis D. Dickerson) により、*Militant Mediator* と題して1998年に刊行されている。<sup>16</sup>

1980年代の初めに、通史の登場という形をもって確立され始めた公民権運動史研究が持つアプローチは、南部史家のチャールズ・W・イーグルス (Charles W. Eagles) も指摘している如く、基本的には伝統的な政治史的、組織史的、そして人物伝的接近法をとるものであった。しかし、他の史的主題分野との対比において若干の遅れを伴いながらも、公民権運動史ナラティブの領域においても、いわゆる「新社会史」(New Social History) 的アプローチの開花が観察され、この新しい接近法は、1980年代に顕著となりはじめ、続く1990年代に入り本格化する。もっともアメリカ史学界における社会史の領域は、既に1960年代から徐々に確立されてきたのではあるが、ここでわざわざ「新」(New) という言葉を冠したうえで使われる、「社会史」という用語が意味するところは、1990年代にアメリカ社会全体を席捲し始める「政治的公正さ」(Political Correctness) の主張と相まりながら、いわば「下からの」、「ボトム・アップ」(bottom-up) な史観なり視点なりに重きを置き、史的ナラティブを構築しようとする接近法である。これはすなわち、旧来、従来「エリートなり指導者層による、トップ・ダウン」(top-down) による、白人(具体的にはWASP) による、男性による「史観からの乖離を図りながら、むしろ「一般大衆による、ボトム・アップによる、白人以外による、女性による」史観の提起を行う試みである。さらにこれを換言すれば、それまで広義において抑圧の対象とされてきた「被抑圧者」なり、歴史の中で忘却されてきた「声無き草の根大衆」からの視点をうい、アメリカの「自国史像」を再構築する動きが、この「新社会史」的アプローチの根底にある。<sup>17</sup>

「新社会史」の登場により、公民権運動史ナラティブの分野にあって、たとえば草の根、ローカル・レベルでの運動、諸権利獲得闘争の中における女性の貢献、さらには人種と経済的階級をめぐっての公民権運動内部での分化、分裂などが、歴史家による考察の対象とされていく。オーラル・ヒストリー・インタビュー(oral histories)を駆使しての、ウィリアム・H・チェーフ(William H. Chafe)により1980年に刊行された*Civilities and Civil Rights*や、同年7月号の*Alabama Review*に掲載された、J・ミルズ・ソートン(J. Mills Thornton)による長文論考、“Challenge and Response in the Montgomery Bus Boycott of 1955-1956”は、こうした新しいアプローチのいわば先駆けの研究業績である。チェーフによる著書、ソートンによる論文のいずれもが、ノースカロライナ州グリーンズボロで展開されたランチ・カウンター「座り込み運動」や、「モントゴメリー・バス・ボイコット運動」といった、公民権運動史上の大きな事件を取り扱ったものではあるが、全国的な意味においてはまさにそれまで「無名」であった人々による、それぞれの運動における草の根の活躍を、地方史的文脈において浮かびあがらせた点においては、それまでの運動史への接近法からの離脱を示した。<sup>18</sup>

チャーフ、ソートンの業績に続く、こうした草の根レベルにおける公民権運動史を研究対象とした学術書としては、前出のデイビッド・ギャロー著、編による、*Protest at Selma*(1978年)や*The Walking City*(1989年)の他に、ダグ・マクアダム(Doug McAdam)による*Freedom Summer*(1988年)ジョン・デイトマー(John Dittmer)による*Local People*(1994年)そして黒人史家のチャールズ・M・ペイン(Charles M. Payne)執筆による*I've Got the Light of Freedom*(1995年)を挙げることが出来よう。この点、日本人公民権運動史研究者の手による研究業績にも、「新社会史」の影響は少なからず及んでいる。アラバマ州の棉作プランテーションを舞台として繰り広げられた、黒人分作小作人達による自由への希求を描いた上杉忍による労作、『公民権運動への道』(1998年)はその代表であり、また「地域闘争」ないしは「ローカル・ストラグル」(“local struggle”)の連続性の中に、公民権運動がもたらした大きなうねりを位置付けようとする試みとしては、川島正樹による近年の諸論考をあげることが出来る。さらには1962年の「ミシシッピ大学事件」の陰に隠れる形で、公民権運動史上あたかも忘却されてしまったかのような、1959年の「南ミシシッピ大学入学事件」(Clyde Kennard incident)での悲劇を取り扱った、片桐康宏(Yasuhiro Katagiri)による*Humanities in the South*における論考、“‘But the People Aren’t Going to Know It, Are They?’”(2002

年)も、広義における「ボトム・アップ」アプローチの表われである。<sup>19</sup>

公民権運動における女性の役割、貢献に関する研究についても、1990年代以降、その量、質共に飛躍的な進展を見せる。ジェンダーと公民権運動との間の、一般的なかかわり合いに関する研究書としては、2004年に刊行された共著、*Gender and the Civil Rights Movement*をあげることが出来る。また、キング牧師と並んで、「モントゴメリー・バス・ボイコット運動」の主演となったローザ・パークス(Rosa Parks)については、2000年にダグラス・ブリנקリー(Douglas Brinkley)が、初の本格的人物伝としての*Rosa Parks*を書き著わす一方、1964年の「ミシシッピー夏期計画」期間中に結成された、「ミシシッピー州自由民主党」(Mississippi Freedom Democratic Party)において活躍をしたファニー・ルー・ヘイマー(Fannie Lou Hamer)に関しては、ケイ・ミルズ(Kay Mills)により*This Little Light of Mine*(1993年)が、そしてチャナ・K・リー(Chana K. Lee)執筆による*For Freedom's Sake*(1999年)が、それぞれ世に送り出されている。<sup>20</sup>

差別される立場に置かれた、もしくは「黒人で、かつ女性」であることによる「二重のバーデン」の中にあつた、南部黒人女性を通して観る公民権運動史叙述ではなく、社会的、経済的に不自由なく生活を送ってきた白人女性なり、北部白人女性による、公民権運動へのかかわりを取り扱った研究書としては、デブラ・L・シュルツ(Debra L. Schultz)による*Going South*(2001年)、キャサリン・フォスル(Catherine Fosl)による*Subversive Southerner*(2002年)、そしてゲイル・S・ミュレーイ(Gail S. Murray)が編者となつた*Throwing Off the Cloak of Privilege*(2004年)等をあげることが出来る。また、公民権運動に自らかかわりを持った9名の白人女性による、運動史回想録としての、コンスタンス・カーリー(Constance Curry)他著による*Deep in Our Hearts*(2000年)は、黒人であれ、白人リベラル層に属する者であれ、「男性上位組織」としての公民権運動組織において果たされた、女性の役割を再考する上で示唆に富む一冊である。一方、日本においては、1987年に出版された『アメリカ南部の夢』に収められた論考、「公民権運動に参加した女性たち」の中において谷中寿子が、黒人女性、白人女性それぞれの公民権運動における役割を論じている。<sup>21</sup>

1960年代後半に露呈するようになった、公民権運動における「白人との共闘」の是非をめぐる分裂は、広義における黒人自身による「自治権」の問題と同時に、人種と経済的階級という問題を内包していた。しばしば、「南部第二再建期」(Second Reconstruction)と呼ばれる1950年代、60

年代において、公民権運動が推し進められる中で表出をした、人種差別と経済的階級格差との間の関係を取り扱った研究書としては、社会学者マニング・マラブル(Manning Marable)による*Race, Reform, and Rebellion* (1984年)や、同じく社会学者であるジャック・M・ブルーム(Jack M. Bloom)著による*Class, Race, and the Civil Rights Movement* (1987年)をあげることが出来よう。<sup>22</sup>

これまで観てきたように、アメリカの「自画像」なり「自国史像」を再構築していく作業において、また公民権運動史叙述の領域においても、「新社会史」の潮流が果たしてきた役割は非常に大きいのであるが、この新たな動きと並んで、1990年代初頭の冷戦の終結もまた、運動史ナラティブに影響を与え始めている。今日、ノースカロライナ州デューク大学(Duke University)名誉教授を務め、高名な黒人歴史家であるジョン・ホープ・フランクリン(John Hope Franklin)が、かつて自著*From Slavery to Freedom* (1947年初版)の中で、第二次世界大戦が黒人にもたらしたインパクトの重要性を強調し、またこの点においては、南部史家ニール・R・マクミラン(Neil R. McMillen)編による、1997年刊行の*Remaking Dixie*においても、同様の指摘がなされている。しかし、ここでの考察の中心となっているのは、スウェーデンの経済学者グンナー・ミュルダール(Gunnar Myrdal)の言葉を借りるのであれば、いわばアメリカ国内に限定された「アメリカのジレンマ」(“American Dilemma”)としての人種問題であり、つまりは公民権運動と内政との間のかかわり合いに関することなのである。<sup>23</sup>

1991年のソヴィエト連邦崩壊を切っ掛けとする冷戦の終焉に伴い、歴史家による同時代に対する再評価が進行する中、旧東側諸国における公文書史料の公開という物理的な事情も相まって、「外なる」冷戦と「内なる」黒人公民権との間の関係を考察する動きが、近年、冷戦期史家や公民権運動史家の間で観察されるようになった。1990年代後半から、ブレンダ・G・プラマー(Brenda G. Plummer)による*Rising Wind* (1996年)の出版を皮切りとして、マイケル・L・クレン(Michael L. Krenn)著による*Black Diplomacy* (1999年)等の、この新分野における研究書が続々と登場している。2000年代に入ると、いわゆる「冷戦の要請」(“Cold War imperative”)という言葉にキーワードに据えながら、マリー・L・ダドジアック(Mary L. Dudziak)やトーマス・ボーステルマン(Thomas Borstelmann)が、それぞれの研究書、*Cold War Civil Rights* (2000年)及び*The Cold War and the Color Line* (2001年)において、国内における人種間関係の改善なり黒人の公民権擁護が、アメリカが対外的な冷戦を遂

行する上での「インペラティブ」(要請)となっていく過程を、緻密に考証している。<sup>24</sup>

## 2. 公民権運動史研究の将来的課題 「運動史」と「裏面史」、「アタッチメント」と「ディタッチメント」、 そして「始まり」と「終わり」

1960年代に、主に歴史家以外の著述家により綴られ始め、1980年代に入り本格化した公民権運動史ナラティブは、これまでにまさに様々な運動史における側面を、学界そして社会に提示してきた。しかし同時に、こうした運動史ナラティブを構築する作業において、取り扱われる主題に関する偏りや公民権闘争への心情的「思い入れ」、さらには公民権運動「史」の時代的境界線の問題等、運動史研究にはいくつかの課題が残されていることも、また事実である。

まず最初に指摘をされねばならない点は、南部黒人による権利獲得闘争を綴った「運動史」、つまりは「表(おもて)面史」の裏には、公民権運動への抵抗を試みた南部白人を主人公としたところの、「裏面史」が存在するという点にある。公民権運動史叙述において、被差別者としての黒人側の歴史を刻む作業は必然ではあるが、その同じ差別をした白人側の立場なり、理論を理解しない限り、真にバランスの取れた公民権運動史ナラティブの完成とはならないであろうし、また広く人種差別問題の本質が見えてこないはずである。この点においてミシシッピ大学(University of Mississippi)歴史学部教授を務める、前出のチャールズ・イーグルスは、これまで公民権運動史家の多くが、南部黒人による権利獲得闘争理解に重きを置く一方で、南部白人による抵抗運動を理解、解釈しようとする「歴史家としての責務」(“professional obligation”)を果たしてきていないとまで述べ、運動史家による「不釣り合いなアプローチ」(“asymmetrical approach”)を断罪している。また、スミソニアン諸博物館の一つである、「全米アメリカ歴史博物館」(National Museum of American History)に勤めるピート・ダニエル(Pete Daniel)も、イーグルスの主張と比べれば言葉穏やかではあるが、本質的には同様の指摘をする。1996年に著わした*Standing at the Crossroads* においてダニエルは、長きにわたり公民権運動史家達が、人種の穏健派に属した南部白人を褒め称えることはしても、「忌々しき人種差別主義者」(“damned all segregationists”)のことを、そして公民権運動の嵐の中に巻き込まれた南部白人による

「怒り」や「恐怖」を、正面から取り扱おうとしない事態を憂えている。<sup>25</sup>

もっとも事実としては、公民権運動史ヒストリオグラフィーの全体的な流れと合致する形で、南部白人による公民権運動への抵抗運動を主題とした著作も、ごく少数ではありながら、当初ジャーナリストなり、公民権運動にかかわりを持った人々により綴られ始めた。しかしこれらの多くは、註釈を配した学術書の形ではなく、いわばエッセー形式の叙述スタイルをとったものであり、かつ地方史的な性格が色濃く表われていた。ミシシッピ州における白人政治家主導による、公民権運動への抵抗運動を主題としたものとしては、同州の白人ジャーナリスト、ホディング・カーター（Hodding Carter）により1959年に記された、*The South Strikes Back* があり、また前出のベンジャミン・ミュースは、*Virginia's Massive Resistance*（1961年）において、ヴァージニア州白人指導者により繰り広げられた「マッシブ・レジスタンス」(Massive Resistance) を克明に記録している。<sup>26</sup>

続く1960年代の終わりから1970年代の初めにかけて、「南部白人の目」から眺めた公民権運動史研究分野において、今や「古典」ともなった研究書2冊が刊行される。その1冊目は、1969年に南部史家ニューマン・V・パートレー（Numan V. Bartley）により執筆された、*The Rise of Massive Resistance* であり、それから2年後の1971年には、最高裁「ブラウン判決」後の南部でその勢いを振るった白人優越主義団体、「白人市民会議（Citizens' Council）の歴史と活動を主題とした*The Citizens' Council* が、前出のニール・マクミランの手により記された。元来、パートレー、マクミランの著作は共に、テネシー州ナッシュビルにある南部の名門校、ヴァンダービルト大学（Vanderbilt University）大学院へ提出された、博士学位論文がそれぞれの原型となっており、両者の論文指導にあたったのが、アメリカ政治史家のデューエイ・W・グランサム（Dewey W. Grantham）であった。<sup>27</sup>

パートレーおよびマクミランによる研究書の刊行後、南部白人による抵抗運動を主題とした若干の博士学位論文が、1970年代、80年代に執筆されるものの、そのいずれもが学術図書として刊行されるには至らなかった。また、上述の「新社会史」的アプローチの伸張や、「政治的公正さ」の主張を前にして、「忌々しき人種差別主義者」を主人公に据えた「マッシブ・レジスタンス」研究が、研究動向や時代の趨勢にそぐわない、いわば「アンファッショナル」な研究対象と目されてしまう。さらには、白人による抵抗運動史を理解、解釈していくうえで不可欠な一次史料 具体的には、抵抗運動を率いた南部諸州政府機関の公文書や、政治



家をはじめとする南部指導者のパーソナル・ペーパーズ等の多くが、不在もしくは未公開の状態にあったことが、抵抗史運動研究の遅々たる進展をもたらした要因ともなった。この最後の点に関してはたとえば、直接的には黒人公民権運動への抵抗機関としていずれも1960年に設立された「ルイジアナ州議会両院合同非米活動委員会」( Louisiana Joint Legislative Committee on Un-American Activities ) および「ルイジアナ州主権委員会」( Louisiana State Sovereignty Commission ) の公文書は、それぞれの活動が停止された1969年以降、暫く同州の公安当局に保管されていた。しかし、後にこれら公文書のほとんどが焼却されてしまったために、今日、州都バトン・ルージュにある「ルイジアナ州立公文書館」( Louisiana State Archives ) で閲覧出来るものは、「両院合同非米活動委員会」に関する、30センチ四方の箱に収まる文書のみである。<sup>28</sup>

しかし、1990年代に入ると、幸運にも焼却、廃棄処分運命にさらされることのなかった、南部諸州政府機関の公文書や、州知事公文書、その他のパーソナル・ペーパーズが徐々に公開されるようになり、この動きに並行する形で、パートレー、マクミランによる研究以降の「空白」を埋めるべく、白人抵抗史運動に関する研究に、歴史家が再び取り組むこととなる。1963年1月の自らのアラバマ州知事就任演説において、「今日も人種差別を、明日も人種差別を、人種差別よ永遠に」( “segregation today, segregation tomorrow, segregation forever” ) と謳いあげた、ジョージ・C・ウォーレス( George C. Wallace ) の州知事公文書に基づき、1995年にはダン・T・カーター( Dan T. Carter ) により、大著 *The Politics of Rage* が出版された。ジョージア州において、州政府主導により繰り広げられた抵抗運動については、1998年にジェフ・ローチ( Jeff Roche ) が *The Sibley Commission and the Politics of Desegregation in Georgia* を記している。また、最高裁「ブラウン判決」後の1956年3月に、ミシシッピ州議会により行政機関として設立され、南部における白人抵抗運動のいわば牽引役を担った「ミシシッピ州主権委員会」( Mississippi State Sovereignty Commission ) については、同委員会が残した総頁数13万2,000頁に及ぶ文書が、1998年3月の連邦地区裁判所命令により公開となり、これを受けて前出の片桐康宏が「州権」( states' rights ) と「公民権」( civil rights ) をキーワードに据え、*The Mississippi State Sovereignty Commission* を2001年に著わしている。<sup>29</sup>

このような研究動向の一方において、ちょうど全体としての公民権運動史叙述においての偏りが観られるように、「マッシュ・レジスタンス」研究分野自体においても、ある種の偏りが確認される。歴史的に黒人

口の集中度が高いことに起因し、白人による抵抗運動が最も激しかった深南部諸州に関する研究が進む中、ヴァージニア、フロリダ、アーカンソー州等の周辺南部諸州における、州政府主導による公民権運動への抵抗運動 たとえば、ヴァージニア州政府により1958年に設立された「立憲政府委員会」( Virginia Commission on Constitutional Government )や、1956年にフロリダ州議会により設立された「調査委員会」( Florida Legislative Investigation Committee )の歴史と活動等 に関する研究書の登場が、今後益々期待される。この点、ヴァージニア州とアーカンソー州において、それぞれ「マッシュ・レジスタンス」の主導的立場を担った、ハリー・F・バード ( Harry F. Byrd ) 連邦上院議員、およびオーバル・E・フォーバス( Orval E. Faubus )州知事に関するポリティカル・バイオグラフィーとして、1996年にロナルド・L・ヘインマン( Ronald L. Heinemann )による *Harry Byrd of Virginia* が、そして翌1997年にロイ・リード( Roy Reed )による *Faubus* が記されたことは、こうした偏りを正していくうえでの重要なステップでもある。<sup>30</sup>

2000年代に入ってから、「マッシュ・レジスタンス」研究分野における新たな動きとしては、前出のニューマン・パートレーも *The Rise of Massive Resistance* において言及したところの、南部白人による抵抗運動と、反共コンフォーミティーとの間の関係を洞察した研究書の登場である。連邦最高裁による1954年の「ブラウン判決」直後から南部白人政治家達は、人種分離教育制度の崩壊と公民権運動への徹底した抗戦の構えを見せるのであるが、そこではあからさまな人種差別主義を前面に押し出す代わりに、南部諸州の「州権の擁護」と「反共主義への統合、コンフォーミティー」を自らの抵抗運動の大義、もしくは「隠れ蓑」としていくのである。皮肉なことにも、冷戦下初期のアメリカ社会を「反共、赤狩り」デマゴグリーに染めた、ジョセフ・R・マッカーシー( Joseph R. McCarthy )連邦上院議員の政治生命が絶たれた そして「ブラウン判決」が下された 1954年になってやっと、南部諸州の白人政治家達は、狂信的な「赤の恐怖」( Red Scare )を拭い去ろうともがくアメリカ社会にあって、「冷戦下におけるコンセンサス」と人種分離、差別制度温存との間の結び付けを図るようになる。

こうして、1950年代後半から1960年代にかけての南部諸州では、「黒人公民権運動、イコール赤の恐怖」という短絡的な図式が横行していくのであるが、白人政治家にとってとどのつまりは、公民権運動指導者、活動家、そして同調者は全て、白人支配層と人種分離制度を核とした「南部の生活様式」に対して反旗を翻す扇動者であるという認識において、

まさに広義における「破壊活動分子」(subversive)であった。そして、白人支配層から観たこうした扇動者達に、「共産主義者」ないしは「自由主義への敵」とのレッテルを貼り付けることによって、南部政治家達は公民権運動そのものの信頼性、信用性を侵食しようとした。

ごく最近になり、冷戦史研究の一端としてではなく、むしろ広く公民権運動史研究、そして狭くは「マッシュ・レジスタンス」研究の一部として、上述の主題に関する研究書が刊行され始めた。2004年初頭にジェフ・ウッズ (Jeff Woods) により著わされた *Black Struggle, Red Scare* は、まさしくこの分野における本格的な研究書であり、またこれに続く形で、英国レスター大学 (University of Leicester) 教授のジョージ・ルイス (George Lewis) による *The White South and the Red Menace* が、同年秋に刊行された。こうしたウッズ、ルイス両名による研究業績は、「南部白人の目」から公民権運動史を理解していくために、大きな貢献となることは間違えないところではあるが、人種分離、差別制度を温存するための抵抗運動と、冷戦下における反共思想との間の結び付きをさらに解明していくためには、南部における人種差別制度を蔑んできたと言われる北部にいる反共思想家、活動家が、南部の人種差別主義者と結託をすることにより、結果として黒人による社会正義と「人間」、「市民」としての尊厳への追求を阻むことになった点についてのさらなる考察も必要である。<sup>31</sup>

いずれにしても、1997年にその初版が出版された、ウィリアム・T・マーティン・リッチス (William T. Martin Riches) による研究書のタイトル、*The Civil Rights Movement: Struggle and Resistance* にもあるように、南部黒人による差別への「闘い」(struggle)と、差別をした南部白人による「抵抗」(resistance)の両局面をバランス良く織り交ぜた公民権運動通史の登場が、今後益々望まれる。ただし、ここでは少し付言を要するのであるが、「差別をした側の南部白人」と言っても、当然のことながら全ての南部白人が人種分離、差別を声高に主張し、その擁護にまわったわけではない。「中道派」(middle-of-the-roader)であろうが、「穏健派」(moderate)であろうが、さらには「進歩派」(liberal)と呼ばれようが、結果として南部黒人による「法の下での平等」への希求を擁護し、時には南部における「マッシュ・レジスタンス」に対しての公然の批判を行った白人政治家、法曹家、知識人、大学教員、そしてジャーナリストの存在を無視することは出来ない。この点、デイビッド・L・シャペル (David L. Chappell) による *Inside Agitators* (1994年)、サラ・ハート・ブラウン (Sarah Hart Brown) の *Standing against Dragons* (1998年)、さらにはキャロル・ポルスグロブ (Carol Polsgrove) が著わした *Divided Minds* (2001年) は、公

民権運動時代における南部白人が、決して「一枚岩」的存在ではあり得なかったことを、明確に示してくれている。<sup>32</sup>

一方、被差別者であった南部黒人の全てが、「非暴力」、「白人との共闘」、さらには「白人社会への統合」といった、公民権運動の思想なり目標に共鳴したわけでもないし、また代表格としてのマルコムX (Malcolm X) のように、もっと直接的に、運動を支持しなかった者や運動の在り方に反対をした者もいたはずである。このように、公民権運動史研究の「裏面」としての「マッシュ・レジスタンス」研究においては、なお多くの課題が残されている。かつて、南部史大家のC・ヴァン・ウッドワード (C. Vann Woodward) は、1968年に初版が刊行された *The Burden of Southern History* において、公民権運動の時代の南部白人による「非アメリカ的な経験」(“un-American experience”) が、まだ十分に語られてきていないとの指摘をしたが、「南部白人の目」から眺めた公民権運動史ナラティブの発展は、このウッドワードによる期待の実現に沿うものではないだろうか。<sup>33</sup>

公民権運動史研究における2つ目の研究課題は、「アタッチメント」(attachment) と「ディタッチメント」(detachment) をめぐる問題である。これまで既に観てきたように、初期の公民権運動史家の多くが、自らが運動に関与してきた活動家であったという事実と共に、単純化された「善玉、悪玉関係」の中にあって、人種分離、差別制度への闘いを挑んだ公民権運動ならびにその活動家は、常に「道義的」(moralistic) で「(神の前に)正しい」(righteous) とする、いわば公民権運動からの「心理的乖離」すなわち「ディタッチメント」が出来ない研究者の存在がある。たとえば、前出のテイラー・ブランチによる大著2冊のタイトルにはそれぞれ、“Parting the Waters” と “Pillar of Fire” という言葉が冠せられ、またこれも前出のデイビッド・ギャローによる著作には、“Bearing the Cross” との言葉がタイトルに充てられているのであるが、ここでは公民権運動を神の命、すなわち天命による道徳的闘争として位置付けようとする心理なり、あるいは公民権運動を、研究者個人がそれにコミットすべき対象として具現化させようとする心理が働いている。<sup>34</sup>

公民権運動(史)からの「ディタッチメント」を図るということは、にもその運動が自らに内在させた目的や、黒人による自由、平等への希求を否定することへは決してつながらない。さらには、歴史家がこの「ディタッチメント」に努め、観察者、叙述者としての客観性を高めることは、公民権運動そのものの意義を否定する作業でもなく、また運動に携わってきた人々の勇気と犠牲を過小評価する動きにも連なっていかな

い。しかしここでの問題は、多くの研究者、研究書が公民権運動の肯定的解釈に終始する一方で、運動が抱えた様々な問題点、運動を率いた指導者達の欠点、さらに重要なことには、広義における「人種的正義」(racial justice)の実現に、公民権運動が果たした、もしくは果たすことの出来なかった役割を、批判的視点を持って評価しようとする姿勢が、全体として欠如している点にある。

たとえば、キング牧師に関する伝記や研究書においても、これまでその大半が同師を、「神聖化」された「偉大な指導者」としてのみ描き出してきた。修正(主義)解釈(revisionist interpretation)さらには再修正(主義)解釈(re-revisionist interpretation)が交錯し続ける、キング牧師と同時代を生き抜いたケネディー大統領に関する研究との対比において、いわば伝統的解釈(traditional interpretation)から抜け出しきれないでいるのが、このキング牧師研究分野であると言えよう。もっとも、*Bearing the Cross*の中においてギャローは、キング牧師による複数の女性との関係に若干言及をしているし、また1990年に、同師による博士論文執筆上の盗用、盗作事件が明らかにされたことを契機として、翌1991年には *Journal of American History* が110頁を超えるスペースを割いて、この問題を取りあげている。いずれにしてもキング牧師研究には、ある種の「偶像破壊」(iconoclastic)的アプローチが必要とされているのではなからうか。この点、2002年にマーシャル・フレイディ(Marshall Frady)により著わされた *Martin Luther King, Jr.* は、同時代を生きた他の人間と同様に、「生身の人間」としての脆弱性を持ち、大小の罪にもまみれた「等身大の人間」としてのキング牧師を、同師が残した「正の遺産」と共にバランス良く検証している。また、米国の「アメリカ史家学会」(Organization of American Historians)が発行する季刊誌、*Magazine of History* の2005年1月号では、キング牧師に関する特集が組まれた。同特集号のためにゲスト・エディターとして招かれた、前出のクレイボーン・カーソンは、キング牧師を「神話化」(“mythologizing”)するのではなく、「弱点、欠点を抱えた一人の人間」(“a flawed human being”)が、その人間としての限界を克服するための葛藤の物語として、公民権運動史におけるキング牧師の位置付けがなされるべき点を強調している。黒人史家であるばかりが、今日、カリフォルニア州スタンフォード大学(Stanford University)において、「マーティン・ルーサー・キング・ジュニア・ペーパーズ・プロジェクト」(Martin Luther King, Jr., Papers Project)の総指揮を執るカーソンによる、「キング牧師を中心に据えた、公民権運動史理解の姿勢」(“King-centered scholarship”)に対する警鐘は、キング牧師研究者、公民権運動

史研究者のみならず、広くアメリカ現代史研究者にとっても、傾聴に値するものであろう。<sup>35</sup>

最後に指摘をしたい、公民権運動史研究における将来的課題は、運動通「史」の「始まり」と「終わり」をめぐる事象である。前出のハーバート・シットコフによる1981年の*The Struggle for Black Equality*刊行以来、公民権運動通史叙述に携わってきた研究者の多くが、運動史の「始まり」と「終わり」をそれぞれ、1954年の「ブラウン判決」と1965年の「投票権法」制定（もしくは、1968年のキング牧師暗殺事件）に据えてきた。たとえば、両者共前出の、テイラー・ブランチによる*Parting the Waters*と*Pillar of Fire*、そしてジョン・サルモンドによる“*My Mind Set on Freedom*”も、いわば「ブラウンから投票権獲得へ」ないしは「ブラウンからキング牧師亡き黒人社会へ」といった時代区分の枠の中において、公民権運動通史を捉えている。同様の時代区分は、1986年にヘンリー・ハンプトン（Henry Hampton）により制作され、「全米公共放送網」が放映をしたドキュメンタリー、*Eyes on the Prize*が採用したクロノロジカル・アウトラインによっても、一般化されていくこととなった。<sup>36</sup>

しかしながら、この「1954年から1965年（ないしは1968年）まで」という、固定化された時代区分的パラダイムにおいてのみ公民権運動史を取り扱うことにより、アメリカ史なり、アメリカ現代史全体の文脈における公民権運動時代の重要性が、見失われてしまう危険性もある。この点、第二次世界大戦前の、フランクリン・D・ローズベルト（Franklin D. Roosevelt）大統領による「ニューディール」（New Deal）政策や、再び前出の斎藤眞の言葉を借りるのであれば、戦争という総動員体制の下、「人的資源としての黒人のエネルギーを有効に動員するために、『差別』ではなく『統合』」が「国家的要請」とされた世界大戦、さらには大戦終結後のハリー・S・トルーマン（Harry S. Truman）大統領による公民権政策を始めとする、1930年代、40年代における黒人の社会的地位をめぐる出来事が、「公民権運動（史）の一部」としてではなく、後の公民権運動への単なる「プレリュード」なり「前兆」（precursor）として、捉えられる傾向が見受けられる。しかしたとえば、労働運動、公民権運動活動家であったA・フィリップ・ランドルフ（A. Philip Randolph）により、黒人に対する雇用差別撤廃を目的として1941年に計画された「ワシントン行進運動」（March on Washington Movement）にしても、また「人種平等会議」とキリスト教平和主義団体「和解のための連帯」（Fellowship of Reconciliation）との間の共同プロジェクトとして実施され、しばしば「最初のフリーダム・ライド運動」（First Freedom Rides）と呼ばれる、1947年の

「和解の旅路」( Journey of Reconciliation ) 計画にしても、後の 1961 年に起きる「フリーダム・ライド運動」や、1963 年のキング牧師による「ワシントン大行進」を予見したうえで、行われたわけでは決していない。<sup>37</sup>

さらには、公民権運動の「裏面」である、南部白人による「マッシュ・レジスタンス」の開始が、連邦政府による 1941 年の「雇用機会均等委員会」( Fair Employment Practices Committee ) 設置や、1948 年大統領選挙で表出した、全国民主党からの南部白人による離反と「州権民主党」( States' Rights Democratic Party ) の結成を觀た、ニューディール期から第二次世界大戦直後にかけての時期に求められるのであれば、当然のことながら公民権運動そのもののルーツも、この同時期に見出すことが出来るはずである。リンダ・リード ( Linda Reed ) による *Simple Decency and Common Sense* ( 1991 年 )、ジェームズ・C・コブ ( James C. Cobb ) の *The Most Southern Place on Earth* ( 1992 年 )、ジョン・イーガートン ( John Egerton ) の *Speak Now against the Day* ( 1994 年 )、ジェーン・デイリー ( Jane Dailey ) の *Before Jim Crow* ( 2000 年 )、前出のアダム・フェアクロフによる *Better Day Coming*、そしてアンソロジーとしての *Reporting Civil Rights* ( Part 1, 2003 年 ) はいずれも、1954 年「ブラウン判決」以前の出来事を、今一度丁寧に取り扱う責務が歴史家にあることを教えてくれる。<sup>38</sup>

連邦最高裁「ブラウン判決」以前の出来事を、公民権運動史叙述の中に繰り入れる努力と同時に、1965 年「投票権法」制定なり、1968 年のキング牧師暗殺以降における、「負の側面」をも含めた、公民権運動がもたらした遺産を検証していく必要や、さらには果たしてこれら 1960 年代後半に起きた出来事をもってして、公民権運動全体の終焉とするべきか、あるいは運動の「一時期」の終わりとするべきかという点についての議論を、さらに煮詰めていく必要もあろう。たとえば、冷戦の終わりがアメリカ、もしくは自由主義陣営諸国の「勝利」( triumph ) であったか否かという解釈については、議論のわかれるところではあるが、一時代区分としての「冷戦期」が終焉を迎えたという認識の点においては、冷戦期研究史家の間での広いコンセンサスが存在する。それに対して、広義における市民権、公民権運動史ナラティブにおいては、確かに初期の「トラディショナル」な公民権運動がその目標としたものではないにしても、強制バス通学 ( forced busing ) の是非に関する議論や、住宅、居住地区をめぐる人種分離 ( residential segregation ) の現状、さらには積極的差別解消、是正策としてのアフーマティブ・アクション政策 ( affirmative action ) が抱える問題等、「現在進行形」の今日的課題をも考察の対象としていく必要がある。また、「ブラウン判決」の結果、公教育制度におけ

る人種分離の壁が崩れた すなわち「ディセグレーション」(desegregation)したことは、疑いようのないところではあるが、この教育分野における壁の崩壊が、真の意味における「人種統合」(インテグレーション、integration)を招来することなく、現実には「再人種分離」化(リセグレーション、re-segregation)の様相を呈しているのが実情でもある。<sup>39</sup>

歴史家のロバート・C・ウィリアムズ(Robert C. Williams)は自身の著、*The Historian's Toolbox* の中において、歴史家というものは事実(史実)を虚構の中から切り離し、かつそれを整理、整列させたうえで「ストーリー」を構築していく「職人」(“craftsmen”)であるとの表現をしている。彼はさらに続けて、「職人」としての歴史家が綴る「ストーリー」には、必然的に「始まり」と「終わり」があることになるが、この「始まり」をどこに見出し、「終わり」をどこに置くのかという点については、それぞれの歴史家が展開する史的「解釈」(“interpretation”)と共に、「ストーリー」構築過程の中での新しき史的「発見」(“discovery”)によって左右される事象であると述べている。公民権運動史を綴る作業においても、ウィリアムズが指摘するように、旧態依然とした時代区分的パラダイムからの別離は、なんらかの新たな「発見」と斬新な「解釈」を、それを学ぶ者達へ提示してくれるはずである。<sup>40</sup>

## おわりに

### アメリカ連邦最高裁判所「ブラウン判決」50周年を迎えて

2004年5月17日にカンザス州トピーカにおいて、連邦最高裁「ブラウン判決」50周年を記念する式典が、ジョージ・W・ブッシュ(George W. Bush)大統領を招いて盛大に開催された。この記念式典でのスピーチにおいて大統領は、「アメリカは未だに、自らが掲げる理想の実現に至っていない」(“America has yet to reach the high calling of its own ideals”)と述べ、21世紀におけるアメリカ社会が抱える最大の問題も、かつてW・E・B・デュボイス(W. E. B. DuBois)が語った「人種の壁をめぐる問題」(“problem of the color-line”)であり続け、また前出のグンナー・ミュルダールの言う「アメリカのジレンマ」が解決しきれないであることを示唆した。一方、史学界においては、「ブラウン判決」50周年を前に、ジェームズ・T・パターソン(James T. Patterson)による *Brown v. Board of Education* (2001年)、ピーター・アイアンズ(Peter Irons)の *Jim Crow's*



*Children* (2002年)、そしてロバート・J・コットロール (Robert J. Cottrol) 他による *Brown v. Board of Education* (2003年) の刊行に代表されるような、この判決の持つ歴史的遺産を改めて検証し直す試みが観られる。<sup>41</sup>

*Jim Crow's Children* を執筆するにあたってアイアンズは、自著の副題に「破られた約束」(“Broken Promise”)という言葉に冠したのであるが、この言葉からも察せられるように、今日の公教育制度における、さらにはアメリカ社会全体における「リセグレーション」、すなわち「再人種分離」化の現状を、アイアンズは嘆き、憂いているのである。結果として「ブラウン判決」が達成することの出来なかった「インテグレーション」「人種統合」不在の状況に鑑みた、こうした歴史家による批判的「ブラウン判決」再考の動きは、なにも判決50周年を迎えることにより、初めて表出したものではない。「ブラウン判決」からちょうど30周年にあたる1984年に、デラウェア大学 (University of Delaware) 歴史学部のレイモンド・ウォルターズ (Raymond Wolters) により、*The Burden of Brown* が著わされたが、同著においてウォルターズは、結果として最高裁の判決は、公立学校における「人種統合」を実現させる代わりに「再人種分離」を招くと共に、黒人学童の教育水準を向上させることにも資することがなかったとの主張を展開した。この研究書の刊行後にウォルターズは、「ブラウン判決」の「正しさ」を主張して止まない、前出の公民権運動史家デイビッド・ギャローによる批判の的とされる。<sup>42</sup>

ウォルターズの研究書をめぐる論争からちょうど10年が経った1994年、ヴァージニア大学 (University of Virginia) 憲法学者のマイケル・J・クラーマン (Michael J. Klarman) が、*Journal of American History* に“*How Brown Changed Race Relations: The Backlash Thesis*”と題する論文を掲載した。自ら“Backlash Thesis”後に“Klarman Thesis”とも呼ばれるようになるという言葉に冠したこの論考においてクラーマンは、南部公民権運動を導いたうえで「ブラウン判決」の重要性を、研究者は余りにも強調、誇張し過ぎているとの指摘をした。クラーマンの理解によれば、「ブラウン判決」の重要性は、後に続く公民権運動の「起爆剤」となった点にあるのではなく、むしろ南部白人による「バックラッシュ」なり「巻き返し」すなわち抵抗運動としての「マッシュ・レジスタンス」を誘発した点にあり、この白人の抵抗運動こそが結果として連邦政府を動かし、1960年代半ばの「公民権法」「投票権法」制定を実現させることになる。*Journal of American History* にこの論文が掲載され、またクラーマンによる同主旨の内容を持った140頁にも及ぶ論考が *Virginia Law Review* に掲載されると同時に、再びギャローによる反撃が開始され、そ

れは10年前のウォルターズに対するものよりもさらに激しいものとなり、ギャローはクラーマンによる公民権運動史解釈を、「絶望的な程浅はかで、不誠実」(“Hopelessly Hollow”)であると糾弾した。<sup>43</sup>

「ブラウン判決」30周年目に刊行されたウォルターズの著作、そして同判決40周年目に発表されたクラーマンの論文をめぐるこうした論争は、1965年なり、1968年までの公民権運動が解決しきれなかった様々な「残存物」が、「アメリカのジレンマ」として確実に存続し続けていることを示すと共に、まさにギャロー自身の言葉を逆に援用するのであれば、「神聖化」された「ブラウン判決」からの「ディタッチメント」が出来ないでいる、そして寛容さを失ってしまったかのように見える、「絶望的」な批判をする研究者の存在をも露呈している。「キャノナイズ」(canonize)された「ブラウン判決」や、「常に正しき、真理なるもの」とされてきた公民権運動を再検証し、運動史ナラティブにおいて再解釈を加えようと試みる研究者 すなわち、「ディタッチメント」をしながら、公民権運動の持つ「負の遺産」を直視しようとする者達の 学究的探究心を、あたかも封じ込めようとする学界の動向を時に垣間見る折に、まさにこの寛容さなり、かつてフランスの政治学者A・トクヴィル(Alexis de Tocqueville)が用い、後に社会学者ロバート・N・ベラー(Robert N. Bellah)らが展開した、「心の習慣」(“Habits of the Heart”) つまりは異論を許容する「モーレス」(習律) が、学術の世界にも必要とされているのではないかと考える。<sup>44</sup>

## Notes

本小論を、かつて米国テキサス州ベイラー大学(Baylor University)政治学部教授を務め、2004年8月8日に他界された、故L・ジェラルド・フィールダー(L. Gerald Fielder)先生に捧げることをお許し願いたい。初めての米国留学の折の1982年、筆者はフィールダー先生がベイラー大学で開講していた「アメリカ合衆国憲法史」(“American Constitutional Development”)のクラスを受講する機会に恵まれたが、同クラスにおける合衆国最高裁判所「ブラウン判決」(1954年)との出会いは、その後の筆者を合衆国南部史、公民権運動史研究へと導く、一つの切っ掛けともなった。(The author would like to dedicate this article to the late L. Gerald Fielder, an emeritus professor of political science at Baylor University in Waco, Texas. His untimely death on 8 August, 2004, profoundly saddened all of those who deeply respected and loved him. While studying at Baylor in 1982, the author was privileged to attend Professor Fielder's meticulously organized class entitled “American Constitutional Development.” It was this lecture where the author first came to know the United States Supreme Court's 1954 *Brown v. Board of Education* ruling, and that would eventually lead the author to become a southern and civil rights historian in later years.)

- 1 アメリカにおける黒人奴隷制史に関するヒストリオグラフィーとしては、Gains M. Foster, “Guilt over Slavery: A Historiographical Analysis,” *Journal of Southern History* [Southern Historical Association] 56 (Nov. 1990): 665-94 が有益である。

なお、アメリカ史における「原罪」という言葉の使用については、齋藤眞『アメリカ革命史研究 自由と統合』東京大学出版会、1992年、52頁；Linda Chavez, “America’s Original Sin” [commentary], 30 May 2001, Townhall.Com: Conservative News and Information, Washington, D.C., consulted 11 July 2004<<http://www.townhall.com/columnists/lindachavez/lc20010530.shtml>> を参照。

- 2 James L. Stokesbury, *A Short History of the Civil War* (New York: William Morrow, 1995); Margaret E. Wagner, Gary W. Gallagher, and Paul Finkelman, eds., *The Library of Congress Civil War Desk Reference* (New York: Simon and Schuster, 2002); E. Merton Coulter, *The Confederate States of America, 1861-1865* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1950); William C. Davis, “A Government of Our Own”: *The Making of the Confederacy* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1994); Marshall L. DeRosa, *The Confederate Constitution of 1861: An Inquiry into American Constitutionalism* (Columbia: University of Missouri Press, 1991).

恐らく南北戦争は、これまでアメリカ人歴史家、作家、そして一般のアメリカ人を、様々な意味において魅了してきた、アメリカ史における一大テーマであり、今日のアメリカにおいても、少なくとも年に数十冊という単位で、この戦争に関する研究学術書、歴史書、また小説が出版され続けている。その一方において、日本におけるアメリカ研究界にあっては、南北戦争に関する研究が立ち遅れている感を否めない。この特定の主題に関する日本における先駆的研究としては、菊池謙一『アメリカの黒人奴隷制度と南北戦争』未来社、1954年や、山本幹雄『南北戦争 その史的条件』法律文化社、1963年などの労作が発表されているが、これらは執筆当時の世相を反映した形での、マルクス史観を根拠に据えた解釈であったり、また南北両地域間の経済制度面における相違を戦争の原因とする解釈を中心にして、南北戦争を捉えたものである。後の1970年代に入ると、よりバランスのとれた南北戦争ナラティブとして、山岸義夫による『南北戦争』近藤出版社、1972年と、『南北戦争研究序説』ミネルヴァ書房、1973年の2冊が世に送り出される。その後、南北戦争史家B・I・ワイリーの翻訳本(B・I・ワイリー著、三浦進訳『南北戦争の歴史』南雲堂、1976年 原著は、Bell Irvin Wiley, *The Road to Appomattox* (Memphis, Tenn.: Memphis State College Press, 1956)) 刊行を見るものの、未だに日本における南北戦争史研究の「開花」には至っていない。

- 3 齋藤『アメリカ革命史研究』212-17頁。合衆国憲法の条文には、「黒人」(“Blacks”)、「奴隷」(“slaves”)、そして「奴隷制」(“slavery”)という言葉が、一切使われていないもの(ただし、制定会議の議論の中では使用されている)、黒人が人格を持った「人間」ではなく、「動産」として扱われた点を示す最も顕著な条文は、各州に対する下院議院議席ならびに直接税の割り当てを規定した、第1条第2節第3項である。しばしば「5分の3条項」と呼ばれるこの条項は、黒人奴隷5人を3人として計算する旨の、南部奴隷制諸州と北部諸州との間に図られた、妥協の産物である。ちなみに、この「5分の3」という数字を憲法制定会議に提出したのは、ペンシルベニア邦代表のジェームズ・ウィルソン(James Wilson)であり、ウィルソンは、「憲法の父」と

されるジェームズ・マディソン (James Madison) に次いで、制定会議において多くの発言をした人物である。これらの諸点については、James Madison, *Notes of Debates in the Federal Convention of 1787*, new and indexed ed. (Athens: Ohio University Press, 1984), 103; Catherine D. Bowen, *Miracle at Philadelphia: The Story of the Constitutional Convention, May to September 1787* (Boston: Little, Brown, and Company, 1966), 95; M・ジェンセン著、斎藤眞・武則忠見・高木誠訳『アメリカ憲法の制定』南雲堂、1976年、72-77頁；斎藤眞「ジェイムズ・ウィルソンと連邦憲法制定の基本原理解」『社会科学ジャーナル』(国際基督教大学社会科学研究所)第24号(1985年)、23-47頁を参照。

なお、リンカーン大統領による「奴隷解放宣言」に関する最近の研究書としては、Allen C. Guelzo, *Lincoln's Emancipation Proclamation: The End of Slavery in America* (New York: Simon and Schuster, 2004) をあげることが出来る。また、同宣言の全文については、Larry Shapiro, *Abraham Lincoln: Mystic Chords of Memory* (New York: Book-of-the-Month Club, 1984), 66-68; 高木八尺・斎藤光訳『リンカーン演説集』岩波書店、1957年、140-42頁を参照。

- 4 John Hope Franklin, *Reconstruction after the Civil War* (Chicago: University of Chicago Press, 1961); Kenneth M. Stampp, *The Era of Reconstruction, 1865-1877* (New York: Knopf, 1965); Eric Foner, *Nothing but Freedom: Emancipation and Its Legacy* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1983); Foner, *Reconstruction: America's Unfinished Revolution, 1863-1877* (New York: Harper and Row, 1988); Ira Berlin, "American Slavery in History and Memory and the Search for Social Justice," *Journal of American History* [Organization of American Historians] 90 (Mar. 2004): 1251-68.

憲法修正第13条、14条、15条についてはそれぞれ、Michael Vorenberg, *Final Freedom: The Civil War, the Abolition of Slavery, and the Thirteenth Amendment* (New York: Cambridge University Press, 2001)、William E. Nelson, *The Fourteenth Amendment: From Political Principle to Judicial Doctrine* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1988)、並びに William Gillette, *Right to Vote: Politics and the Passage of the Fifteenth Amendment* (Baltimore, Md.: Johns Hopkins University Press, 1965) が参考になる。

なお、日本における南部再建期史家、長田豊臣による『南北戦争と国家』東京大学出版会、1992年は、南北戦争という内戦の勃発を契機として表出した、連邦政府権力の肥大化と、奴隷制度崩壊に伴う社会的変革を考察した、示唆に富む研究書である。また、南北戦争がもたらした政治的意義としての、「連邦制度の擁護、確立」という点については、高木八尺『アメリカ』東京大学出版会、1962年、43-55頁を参照。

- 5 Roy Morris, Jr., *Fraud of the Century: Rutherford B. Hayes, Samuel Tilden, and the Stolen Election of 1876* (New York: Simon and Schuster, 2003). また、今日連邦最高裁判所首席判事を務めるウィリアム・H・レンキスト (William H. Rehnquist) の手による、*Centennial Crisis: The Disputed Election of 1876* (New York: Knopf, 2004) もある。
- 6 V.O. Key, Jr., *Southern Politics in State and Nation* (New York: Knopf, 1949); J. Morgan Kousser, *The Shaping of Southern Politics: Suffrage Restriction and the Establishment of the One-Party South, 1880-1910* (New Haven, Conn.: Yale University Press, 1974); Donald G. Nieman, *Promises to Keep: African-Americans and the Constitutional Order, 1776 to the Present* (New York:

Oxford University Press, 1991).

- 7 C. Vann Woodward, *The Strange Career of Jim Crow* (New York: Oxford University Press, 1955); Leon F. Litwack, *Trouble in Mind: Black Southerners in the Age of Jim Crow* (New York: Knopf, 1998); Brook Thomas, ed., *Plessy v. Ferguson: A Brief History with Documents* (Boston: Bedford/St. Martin's, 1996); Harvey Fireside, *Separate and Unequal: Homer Plessy and the Supreme Court Decision That Legalized Racism* (New York: Carroll and Graf, 2004).

なお、Woodwardの*The Strange Career of Jim Crow*は、1977年に日本で邦訳されている(C・V・ウッドワード著、清水博・長田豊臣・有賀貞訳『アメリカ人種差別の歴史』福村出版、1977年)。

- 8 かつて、英米法、アメリカ憲法学者の田中英夫も指摘した通り、「公民権運動」の「公民権」という言葉は、日本語ではそもそも、公職に就く資格なり、投票権、選挙権、参政権などを指し示す言葉である。その意味においては、アメリカ南部における“civil rights movement”を、再び田中の示唆する如く、「市民的権利」とするのがより正確なのかもしれないが、南部「公民権運動」の歴史が、黑人によるいわゆる「市民権」獲得から、政治過程への参加へと変遷していったことに鑑み、本稿執筆に際しては、敢えて日本語の定訳となっている「公民権」という言葉を使用する。この点については、田中英夫『英米法のことば』有斐閣、1986年、36-43頁、および有賀貞『ヒストリカル・ガイド アメリカ』山川出版社、2004年、159-60頁を参照。

- 9 Anthony Lewis, *Portrait of a Decade: The Second American Revolution* (New York: Random House, 1964); Benjamin Muse, *Ten Years of Prelude: The Story of Integration since the Supreme Court's 1954 Decision* (New York: Viking, 1964); J.W. Peltason, *Fifty-Eight Lonely Men: Southern Federal Judges and School Desegregation* (New York: Harcourt, Brace, and World, 1961); James W. Vander Zanden, *Race Relations in Transition: The Segregation Crisis in the South* (New York: Random House, 1965).

英語の“historiography”という言葉は、しばしば日本語で「史料編修」や、「修史論」、「歴史学方法論」などと訳出され、その実体がわかりづらい用語である。本稿においてはこの言葉を、「ある事象、主題を歴史家が(もしくは広義において、歴史叙述に携わる人々が)捉えてきた歴史」、すなわち「歴史叙述の歴史」という意味で用い、日本語表記もカタカナ表記での「ヒストリオグラフィー」としている。

エッセイ調、もしくは書評調で記された、公民権運動史のヒストリオグラフィーとしては、George S. Burson, Jr., “The Second Reconstruction: A Historiographical Essay on Recent Works,” *Journal of Negro History* [Association for the Study of African-American Life and History] 59 (Oct. 1974): 322-36; Dan T. Carter, “From Segregation to Integration,” in *Interpreting Southern History: Historiographical Essays in Honor of Sanford W. Higginbotham*, ed. John B. Boles and Evelyn T. Nolen (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1987), 408-33; George Rehin, “Of Marshalls, Myrdals and Kings: Some Recent Books about the Second Reconstruction,” *Journal of American Studies* [British Association for American Studies] 22 (Apr. 1988): 87-103; Adam Fairclough, “Historians and the Civil Rights Movement,” *Journal of American Studies* 24 (Dec. 1990): 387-98; Steven F. Lawson, “Freedom Then, Freedom Now: The Historiography of the Civil Rights Movement,” *American Historical Review* [American Historical Association] 96 (Apr. 1991): 456-71; David J. Garrow, Nathan I. Huggins, and Clayborne

## Defining the South's Second Reconstruction

Carson, "The Civil Rights Movement: Top-Down or Bottom-Up?," in *From Reconstruction*, vol. 2 of *Interpretations of American History: Patterns and Perspectives*, 7th ed., ed. Francis G. Couvares, Martha Saxton, Gerald N. Grob, and George A. Billias (New York: Free Press, 2000), 307-44; Charles W. Eagles, "Toward New Histories of the Civil Rights Era," *Journal of Southern History* 66 (Nov. 2000): 815-48; Fairclough, "Segregation and Civil Rights: African American Freedom Strategies in the Twentieth Century," in *The State of U.S. History*, ed. Melvyn Stokes (Oxford, U.K.: Berg, 2002), 155-75 が有益である。

これらの他に、Armstead L. Robinson and Patricia Sullivan, eds., *New Directions in Civil Rights Studies* (Charlottesville: University Press of Virginia, 1991) や、Paul T. Murray, ed., *The Civil Rights Movement: References and Resources* (New York: G.K. Hall, 1993) も参考になる。

また、厳密な意味においての公民権運動史ヒストリオグラフィーではないが、日本においても、谷中寿子「最近の南部社会を中心に」、藤岡惇「南部の経済 20世紀を中心に」、並びに藤本一美「日本におけるアメリカ『南部政治』研究」『東京大学アメリカ研究資料センター年報』第12号(1989年)、11-41頁(いずれも、「日本におけるアメリカ研究の発達と現状 アメリカ南部研究」をテーマとした、報告会での発表が基となったもの)があり、それぞれに示唆に富む論考である。

- 10 August Meier and Elliott Rudwick, *CORE: A Study in the Civil Rights Movement, 1942-1968* (New York: Oxford University Press, 1973); Howard Zinn, *SNCC: The New Abolitionists* (Boston: Beacon, 1964).

他に、Zinn, *The Southern Mystique* (New York: Simon and Schuster, 1964); Meier, *A White Scholar and the Black Community, 1945-1965: Essays and Reflections* (Amherst: University of Massachusetts Press, 1992) も参照。

- 11 Richard Kluger, *Simple Justice: The History of Brown v. Board of Education and Black America's Struggle for Equality* (New York: Knopf, 1976); Jack Bass, *Unlikely Heroes* (New York: Simon and Schuster, 1981).

なお、クルーガーによる *Simple Justice* は、最高裁「ブラウン判決」50周年を迎えた2004年に、“New Expanded Edition”として、ニューヨークのVintageから再刊行されている。

- 12 Harvard Sitkoff, *The Struggle for Black Equality, 1954-1980* (New York: Hill and Wang, 1981). このシットコフによる初の公民権運動通史は、1993年に同じ出版社より新版が刊行され、タイトルも *The Struggle for Black Equality, 1954-1992* へ改められた。

- 13 Juan Williams, *Eyes on the Prize: America's Civil Rights Years, 1954-1965* (New York: Viking, 1987); Taylor Branch, *Parting the Waters: America in the King Years, 1954-1963* (New York: Simon and Schuster, 1988); Branch, *Pillar of Fire: America in the King Years, 1963-1965* (New York: Simon and Schuster, 1998); David R. Goldfield, *Black, White, and Southern: Race Relations and Southern Culture, 1940 to the Present* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1990); John A. Salmond, "My Mind Set on Freedom": *A History of the Civil Rights Movement, 1954-1968* (Chicago: Ivan R. Dee, 1997); Adam Fairclough, *Better Day Coming: Blacks and Equality, 1890-2000* (New York: Penguin, 2001).

キング牧師により体現された「アガベ」の思想、並びに公民権運動における黒人教会組織、とりわけバプティスト教会の重要性に関する邦語文献としては、中島和子『黒人の政治参加と第三世紀アメリカの出発』中央大学出版部、1989年が、また同主題に関する英語文献としては、Aldon D. Morris, *The Origins of the Civil Rights Movement: Black Communities Organizing for Change* (New York: Free Press, 1984) が有益である。

なお、白人、黒人を問わず、キリスト教、教会組織、そして教徒が公民権運動に与えた、正、負両面におけるインパクトに関しては、神学者チャールズ・マーシュ (Charles Marsh) による、*God's Long Summer: Stories of Faith and Civil Rights* (Princeton, N.J.: Princeton University Press, 1997)、公民権運動史家デイビッド・L・シャペル (David L. Chappell) による、*A Stone of Hope: Prophetic Religion and the Death of Jim Crow* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2004)、そして同じく公民権運動史家ジェーン・デイリー (Jane Dailey) による、“Sex, Segregation, and the Sacred after Brown,” *Journal of American History* 91 (June 2004): 119-44 が参考になる。

また、南部における宗教的な意味でのマイノリティであるユダヤ教徒と、黒人公民権運動との間の関係を取り扱った良著としては、英国人公民権運動史家クライブ・ウェブ (Clive Webb) の手による、*Fight against Fear: Southern Jews and Black Civil Rights* (Athens: University of Georgia Press, 2001) がある。

- 14 Clayborne Carson, *In Struggle: SNCC and the Black Awakening of the 1960s* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1981); Adam Fairclough, *To Redeem the Soul of America: The Southern Christian Leadership Conference and Martin Luther King, Jr.* (Athens: University of Georgia Press, 1987); James Haskins, *Thurgood Marshall: A Life for Justice* (New York: Henry Holt, 1992); Mark V. Tushnet, *Making Civil Rights Law: Thurgood Marshall and the Supreme Court, 1936-1961* (New York: Oxford University Press, 1994); Tushnet, *Making Constitutional Law: Thurgood Marshall and the Supreme Court, 1961-1991* (New York: Oxford University Press, 1997); Kenneth R. Janken, *White: The Biography of Walter White, Mr. NAACP* (New York: New Press, 2003); Walter White, *A Man Called White: The Autobiography of Walter White* (New York: Viking, 1948); Roy Wilkins, *Standing Fast: The Autobiography of Roy Wilkins* (New York: Viking, 1982).

ただし、黒人史家であるカーソンについては、かつて「学生非暴力調整委員会」の活動にかかわりを持った人物であるので、ここに言う、完全な意味における「アウトサイダー」歴史家とすることは出来ない。最高裁「ブラウン判決」以前における「全国黒人地位向上協会」の活動、その中でも特に大学院教育分野における人種分離の壁の撤廃運動については、上で言及しているマーク・V・タシュネット (Mark V. Tushnet) が、*The NAACP's Legal Strategy against Segregated Education, 1925-1950* (Chapel Hill: University of North Carolina Press) を、1987年に書き著わしている。

- 15 James Farmer, *Lay Bare the Heart: An Autobiography of the Civil Rights Movement* (New York: Arbor House, 1985); John Lewis and Michael D'Orso, *Walking with the Wind: A Memoir of the Movement* (New York: Simon and Schuster, 1998); Stokely Carmichael and Kwame Ture, *Ready for Revolution: The Life and Struggles of Stokely Carmichael (Kwame Ture)* (New York: Scribner, 2003); Eric Burner, *And Gently He Shall Lead Them: Robert Parris Moses and Civil Rights in Mississippi* (New York: New York University Press, 1994).

## Defining the South's Second Reconstruction

後に自らを、Kwame Ture とのアフリカ名で呼ぶようになるカーマイケルが提唱した、「ブラック・パワー」の思想については、Stokely Carmichael and Charles V. Hamilton, *Black Power: The Politics of Liberation in America* (New York: Random House, 1967) が参考になる。

- 16 David J. Garrow, *Bearing the Cross: Martin Luther King, Jr., and the Southern Christian Leadership Conference* (New York: Random House, 1986); Ralph D. Abernathy, *And the Walls Came Tumbling Down: An Autobiography* (New York: Harper and Row, 1989); Andrew Young, *An Easy Burden: The Civil Rights Movement and the Transformation of America* (New York: Harper Collins, 1996); Dennis C. Dickerson, *Militant Mediator: Whitney M. Young, Jr.* (Lexington: University Press of Kentucky, 1998).

なお、アバナシー牧師の娘である、ドンザレー・アバナシー (Donzaleigh Abernathy) による、*Partners to History: Martin Luther King, Jr., Ralph David Abernathy, and the Civil Rights Movement* (New York: Crown, 2003) もある。

- 17 Eagles, "Toward New Histories of the Civil Rights Era," 826; Paul K. Conkin and Roland N. Stromberg, *Heritage and Challenge: The History and Theory of History* (Arlington Heights, Ill.: Forum, 1989), 111-19; 遠藤泰生「多文化主義とアメリカの過去 歴史の破壊と創造」油井大三郎・遠藤泰生編『多文化主義のアメリカ 揺らぐナショナル・アイデンティティ』東京大学出版会、1999年、21-24頁。

歴史ナラティブの手法、接近法としての、「下からの」(“from the bottom up”) という言葉に関しては、Peter Novick, *That Noble Dream: The “Objectivity Question” and the American Historical Profession* (New York: Cambridge University Press, 1988), 442 を参照。

- 18 William H. Chafe, *Civilities and Civil Rights: Greensboro, North Carolina, and the Black Struggle for Freedom* (New York: Oxford University Press, 1980); J. Mills Thornton, “Challenge and Response in the Montgomery Bus Boycott of 1955-1956,” *Alabama Review* [Alabama Historical Association] 33 (July 1980): 163-235.

なお、公文書 (archival papers) やパーソナル・ペーパーズ (personal papers) と同様に、一次資料 (史料) としてのカテゴリーに区分されるオーラル・ヒストリー・インタビューは、特別な場合を除いて、通常ヒストリオグラフィーに含まれることはない。しかし、「新社会史」隆盛の中にあつて、実証研究を試みる公民権運動研究者にとっては、これらオーラル・ヒストリーズは欠かすことの出来ない貴重な史料であるために、敢えて以下に、研究者にとっての有益性が比較的高いと思われる、いくつかのオーラル・ヒストリー・プロジェクトを列記する。Mississippi Oral History Project, Center for Oral History and Cultural Heritage, University of Southern Mississippi, Hattiesburg <<http://www.usm.edu/oralhistory>>; Behind the Veil Project, Center for Documentary Studies, Duke University, Durham, North Carolina <<http://cds.aas.duke.edu/btv/index.html>>; Oral History Project, Birmingham Civil Rights Institute, Birmingham, Alabama <[http://www.bcri.org/archives/collections\\_guide/index.htm](http://www.bcri.org/archives/collections_guide/index.htm)>; Southern Oral History Program, University of North Carolina, Chapel Hill <<http://www.lib.unc.edu/instruct/manuscripts/collections/sohp.html>>; Oral History Research Office, Columbia University, New York <<http://www.columbia.edu/cu/lweb/indiv/oral>>.

- 19 David J. Garrow, *Protest at Selma: Martin Luther King, Jr., and the Voting Rights Act of 1965*



- (New Haven, Conn.: Yale University Press, 1978); Garrow, ed., *The Walking City: The Montgomery Bus Boycott, 1955-1956* (Brooklyn, N.Y.: Carlson, 1989); Doug McAdam, *Freedom Summer* (New York: Oxford University Press, 1988); John Dittmer, *Local People: The Struggle for Civil Rights in Mississippi* (Urbana: University of Illinois Press, 1994); Charles M. Payne, *I've Got the Light of Freedom: The Organizing Tradition and the Mississippi Freedom Struggle* (Berkeley: University of California Press, 1995); 上杉忍 『公民権運動への道 アメリカ南部農村における黒人のたたかい』岩波書店、1998年；川島正樹 『『ボイコット』から『座り込み』へ 地域闘争としての南部市民権運動』紀平英作編 『帝国と市民 苦悩するアメリカ民主政』山川出版社、2003年、213-59頁；川島 『オールバニー運動再訪 一連の地域闘争としての米国民権運動史研究試論』『アカデミア 人文・社会科学編』（南山大学）第75号（2002年）、93-146頁；川島 『『リトルロック学校危機』事件再訪 1950年代末の『上からの』隔離廃止努力と南部地域社会』『アカデミア』第77号（2003年）151-209頁；Yasuhiro Katagiri, “‘But the People Aren’t Going to Know It, Are They?’: The Clyde Kennard Incident in Mississippi and the Redemption of a Southern University,” *Humanities in the South* [Southern Humanities Council, Conyers, Georgia] 89 (2002): 84-95.
- 20 Peter J. Ling and Sharon Monteith, eds., *Gender and the Civil Rights Movement* (Piscataway, N.J.: Rutgers University Press, 2004); Douglas Brinkley, *Rosa Parks* (New York: Penguin, 2000); Kay Mills, *This Little Light of Mine: The Life of Fannie Lou Hamer* (New York: Penguin, 1993); Chana K. Lee, *For Freedom’s Sake: The Life of Fannie Lou Hamer* (Urbana: University of Illinois Press, 1999).
- なお、パークスによる自叙伝としての *Rosa Parks* が、アメリカにおいて1992年に出版されたが、それから2年後の1994年には、同書は日本語にも訳出されている。この点については、Rosa Parks and Jim Haskins, *Rosa Parks: My Story* (New York: Dial, 1992); ローザ・パークス著、高橋朋子訳 『ローザ・パークス自伝 黒人の誇り・人間の誇り』サイマル出版会、1994年を参照。
- 21 Debra L. Schultz, *Going South: Jewish Women in the Civil Rights Movement* (New York: New York University Press, 2001); Catherine Fosl, *Subversive Southerner: Anne Braden and the Struggle for Racial Justice in the Cold War South* (New York: Palgrave, 2002); Gail S. Murray, ed., *Throwing Off the Cloak of Privilege: White Southern Women Activists in the Civil Rights Era* (Gainesville: University Press of Florida, 2004); Constance Curry, et al., *Deep in Our Hearts: Nine White Women in the Freedom Movement* (Athens: University of Georgia Press, 2000); 谷中寿子 『公民権運動に参加した女性たち 共闘から分裂、自立へ』井出義光・明石紀雄編 『アメリカ南部の夢 ニューサウスの政治・経済・文化』有斐閣、1987年、69-88頁。
- 他に、特にミシシッピ州での公民権運動における女性の役割については、Winson Hudson and Constance Curry, *Mississippi Harmony: Memoirs of a Freedom Fighter* (New York: Palgrave, 2002) や、Martha H. Swain, Elizabeth A. Payne, and Marjorie J. Spruill, eds., *Mississippi Women: Their Histories, Their Lives* (Athens: University of Georgia Press, 2003) も参考になる。
- 22 Manning Marable, *Race, Reform, and Rebellion: The Second Reconstruction in Black America, 1945-1982* (Jackson: University Press of Mississippi, 1984); Jack M. Bloom, *Class, Race, and the Civil Rights Movement* (Bloomington: University of Indiana Press, 1987).

## Defining the South's Second Reconstruction

- 23 John Hope Franklin, *From Slavery to Freedom: A History of African Americans* (New York: McGraw-Hill, 1947); Neil R. McMillen, ed., *Remaking Dixie: The Impact of World War on the American South* (Jackson: University Press of Mississippi, 1997); Gunnar Myrdal, *An American Dilemma: The Negro Problem and Modern Democracy*, 2 vols. (New York: Harper and Brothers, 1944).
- 24 Brenda G. Plummer, *Rising Wind: Black Americans and U.S. Foreign Affairs, 1935-1960* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1996); Michael L. Krenn, *Black Diplomacy: African Americans and the State Department, 1945-1969* (Armonk, N.Y.: E. M. Sharpe, 1999); Mary L. Dudziak, *Cold War Civil Rights: Race and the Image of American Democracy* (Princeton, N.J.: Princeton University Press, 2000); Thomas Borstelmann, *The Cold War and the Color Line: American Race Relations in the Global Arena* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 2001).

他に、考察の対象とする時代を、ロナルド・W・レーガン (Ronald W. Reagan) 大統領政権期まで広げた、前出のプラマー編による、*Window on Freedom: Race, Civil Rights, and Foreign Affairs, 1945-1988* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2003) も参考になる。

- 25 Eagles, "Toward New Histories of the Civil Rights Era," 815-16, 842; Pete Daniel, *Standing at the Crossroads: Southern Life in the Twentieth Century* (Baltimore, Md.: Johns Hopkins University Press, 1996), viii, 201.
- 26 Hodding Carter, *The South Strikes Back* (Garden City, N.Y.: Doubleday, 1959); Benjamin Muse, *Virginia's Massive Resistance* (Bloomington: Indiana University Press, 1961).

英語の "Massive Resistance" という言葉は、固有名詞化されて、アメリカ史、南部史叙述の中にしばしば登場してくるのであるが、日本語に訳しにくい言葉の一つであり、本稿においては敢えて「マッシブ・レジスタンス」とのカタカナ表記にした。この点、藤本一美は、自著『アメリカの政治と政党再編成 「サンベルト」の変容』勁草書房、1988年、264頁において、試みとしての傍点を付したうえで、「大抵抗運動」との訳語をあてているが、具体的にここで使われている "Massive" という言葉には、「一歩たりとも引かぬ、全面的な」との含意がある。

なお、この言葉の生みの親となったのは、ヴァージニア州選出民主党連邦上院議員を務め、また同州における強大な政治組織「バード・マシーン」(Byrd Machine) を率いた、ハリー・F・バード (Harry F. Byrd) であり、1956年2月25日、連邦最高裁の「ブラウン判決」に抵抗の姿勢を見せるバードが、首都ワシントンにおいて記者団を前に発表をした声明文において使ったものである。バード上院議員による声明文については、「Byrd Calls on South to Challenge Court,」 *New York Times*, 26 Feb. 1956, pp. 1, 49 を参照。

- 27 Numan V. Bartley, *The Rise of Massive Resistance: Race and Politics in the South during the 1950's* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1969); Neil R. McMillen, *The Citizens' Council: Organized Resistance to the Second Reconstruction, 1954-64* (Urbana: University of Illinois Press, 1971).

グランサムによる代表的著作としては、南部再建期以降、半世紀以上にわたって続いた、南部における民主党による一党支配の崩壊過程を考察した、*The Life and*

*Death of the Solid South: A Political History* (Lexington: University Press of Kentucky, 1988) をあげることが出来る。

- 28 1970年代、80年代に提出、受理をされた、南部白人の抵抗運動を主題とした博士学位論文としては、James T. Harris, *Alabama Reaction to the Brown Decision, 1954-1956: A Case Study in Early Massive Resistance*, Ph.D. diss., Middle Tennessee State University, 1978 (Ann Arbor, Mich.: University Microfilms International, 1978), 7822621, や William M. Stowe, Jr., *Willie Rainach and the Defense of Segregation in Louisiana, 1954-1959*, Ph.D. diss., Texas Christian University, 1989 (Ann Arbor, Mich.: University Microfilms International, 1989), 8919934 等がある。

ちなみに、パートレーの手による *The Rise of Massive Resistance* が刊行される5年前の1964年に、アーリーン・M・マッカーリック (Earlean M. McCarrick) による、ルイジアナ州における州政府主導による抵抗運動を主題とした博士論文が、パートレーも学んだヴァンダービルト大学大学院へ提出されている。この点については、Earlean M. McCarrick, *Louisiana's Official Resistance to Desegregation*, Ph.D. diss., Vanderbilt University, 1964 (Ann Arbor, Mich.: University Microfilms International, 1965), 6504551 を参照。

なお、「ルイジアナ州議会両院合同非米活動委員会」公文書、並びに「ルイジアナ州主権委員会」公文書に関する記述は、L. Malcolm Morris [Assistant Director, Louisiana State Archives], unrecorded conversation with the author, 29 Nov. 1993, Baton Rouge, Louisiana [the author's memo]; Jay Hughes, "Mississippi Tried to Rally Southern Neighbors to Share Spy Files" [Associated Press newspaper article], 18 Mar. 1998, n.p., in *A-Infos*, n.p., Canada, consulted 17 June 2004 <<http://www.ainfos.ca/98/mar/ainfos00188.html>> によるものである。

- 29 Dan T. Carter, *The Politics of Rage: George Wallace, the Origins of the New Conservatism, and the Transformation of American Politics* (New York: Simon and Schuster, 1995); Jeff Roche, *The Sibley Commission and the Politics of Desegregation in Georgia* (Athens: University of Georgia Press, 1998); Yasuhiro Katagiri, *The Mississippi State Sovereignty Commission: Civil Rights and States' Rights* (Jackson: University Press of Mississippi, 2001).

なお、蛇足ながら、筆者による英文小著、*The Mississippi State Sovereignty Commission* に対する書評において、広く「マッシュ・レジスタンス」研究の重要性や発展の可能性に言及しているものとしては、Mark Newman, *American Historical Review* 107 (Oct. 2002): 1253-54; John T. Ellis, *Journal of Mississippi History* [Mississippi Historical Society] 64 (Winter 2002): 342-43; J. Michael Butler, *Journal of Southern History* 69 (May 2003): 478-79; Charles W. Eagles, *Journal of American History* 90 (June 2003): 302-03; Don Debats, *Australasian Journal of American Studies* [Australian and New Zealand American Studies Association] 22 (July 2003): 126-29 を参照されたい。

- 30 Ronald L. Heinemann, *Harry Byrd of Virginia* (Charlottesville: University Press of Virginia, 1996); Roy Reed, *Faubus: The Life and Times of an American Prodigal* (Fayetteville: University of Arkansas Press, 1997).

ヴァージニア州「立憲政府委員会」、およびフロリダ州議会「調査委員会」の概説の全体像については、George Lewis, "The Virginia Commission for [sic] Constitutional Government: 'Responsible' Resistance to the Civil Rights Movement," paper delivered at the annual meeting of the Organization of American Historians, Boston, 26 Mar. 2004 [in the author's pos-

session by courtesy of George Lewis, University of Leicester, U.K.]; Steven F. Lawson, "The Florida Legislative Investigation Committee and the Constitutional Readjustment of Race Relations, 1956-1963," in *An Uncertain Tradition: Constitutionalism and the History of the South*, ed. Kermit L. Hall and James W. Ely, Jr. (Athens: University of Georgia Press, 1989), 296-325 を参照。

- 31 Jeff Woods, *Black Struggle, Red Scare: Segregation and Anti-Communism in the South, 1948-1968* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 2004); George Lewis, *The White South and the Red Menace: Segregationists, Anticommunism, and Massive Resistance, 1945-1965* (Gainesville: University Press of Florida, 2004).

なお、学術書として刊行されてはいないが、公民権運動に対する南部の抵抗と、反共コンフォーミティーとの関係を取り扱った先駆的研究として、Wayne A. Clark, *An Analysis of the Relationship between Anti-Communism and Segregationist Thought in the Deep South, 1948-1964*, Ph.D. diss., University of North Carolina, 1976 (Ann Arbor, Mich.: University Microfilms International, 1976), 7702025 をあげることが出来る。

- 32 William T. Martin Riches, *The Civil Rights Movement: Struggle and Resistance* (New York: Palgrave, 1997); David L. Chappell, *Inside Agitators: White Southerners in the Civil Rights Movement* (Baltimore, Md.: Johns Hopkins University Press, 1994); Sarah Hart Brown, *Standing against Dragons: Three Southern Lawyers in an Era of Fear* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1998); Carol Polsgrove, *Divided Minds: Intellectuals and the Civil Rights Movement* (New York: Norton, 2001).

ただし、リッチスによるここでの“Resistance”という意味は、直接的に1950年代、60年代の「マッシュ・レジスタンス」を指し示すものではなく、具体的には1968年以降のアメリカ社会の保守化なり、南部のみならず全米的な意味合いおける、白人による「巻き返し」を示すものである。

南部白人の「非一枚岩性」を取り扱った著作としては、上記の他に、Carter, *The South Strikes Back*; Ann Waldron, *Hodding Carter: The Reconstruction of a Racist* (Chapel Hill, N.C.: Algonquin, 1993); James W. Silver, *Mississippi: The Closed Society* (New York: Harcourt, Brace, and World, 1964); Silver, *Running Scared: Silver in Mississippi* (Jackson: University Press of Mississippi, 1984); Frank E. Smith, *Congressman from Mississippi* (New York: Capricorn, 1964); Smith, *Look Away from Dixie* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1965); Dennis J. Mitchell, *Mississippi Liberal: A Biography of Frank E. Smith* (Jackson: University Press of Mississippi, 2001); P.D. East, *The Magnolia Jungle: The Life, Times and Education of a Southern Editor* (New York: Simon and Schuster, 1960); Gary Huey, *Rebel with a Cause: P.D. East, Southern Liberalism, and the Civil Rights Movement, 1953-1971* (Wilmington, Del.: Scholarly Resources, 1985); Carl Elliot, Sr., and Michael D'Orso, *The Cost of Courage* (New York: Anchor, 1992); John Hayman, *Bitter Harvest: Richmond Flowers and the Civil Rights Revolution* (Montgomery, Ala.: Black Belt, 1996); Ralph McGill, *The South and the Southerner* (Boston: Little, Brown, and Company, 1963); Leonard R. Teel, *Ralph Emerson McGill: Voice of the Southern Conscience* (Knoxville: University of Tennessee Press, 2001); Harry S. Ashmore, *Hearts and Minds: A Personal Chronicle of Race in America*, rev. ed. (Cabin John, Md.: Seven Locks, 1988); Anthony L. Newberry, *Without Urgency or Ardor: The South's Middle-of-the-Road Liberals and Civil*

*Rights, 1945-1960*, Ph.D. diss., Ohio University, 1982 (Ann Arbor, Mich.: University Microfilms International, 1983), 8300026; Donald Cunnigen, *Men and Women of Goodwill: Mississippi's White Liberals*, Ph.D. diss., Harvard University, 1987 (Ann Arbor, Mich.: University Microfilms International, 1988), 8820540 等を参照。

- 33 Malcolm X and Alex Haley, *The Autobiography of Malcolm X* (New York: Grove, 1965); James H. Cone, *Martin and Malcolm and America: A Dream or a Nightmare* (Maryknoll, N.Y.: Orbis, 1991); Julius E. Thompson, *Percy Greene and the Jackson Advocate: The Life and Times of a Radical Conservative Black Newspaperman, 1897-1977* (Jefferson, N.C.: McFarland, 1994); Timothy B. Tyson, *Radio Free Dixie: Robert F. Williams and the Roots of Black Power* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1999); Lance Hill, *The Deacons for Defense: Armed Resistance and the Civil Rights Movement* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2004); C. Vann Woodward, *The Burden of Southern History*, rev. ed. (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1968), 22.

Cone による *Martin and Malcolm and America* は、1996年に邦訳書が刊行されている(ジェームズ・H・コーン著、梶原寿訳『夢か悪夢か キング牧師とマルコムX』日本基督教団出版局、1996年)。また、上坂昇『キング牧師とマルコムX』講談社、1994年も参照。

なお、Hill による *The Deacons for Defense* について詳しくは、Yasuhiro Katagiri, "Tough Enough to Take It and Big Enough to Hit Back: Beyond the Backlash Thesis?," review of *The Deacons for Defense*, online posting, 7 January 2005, H-1960s discussion list [H-Net Discussion Networks, Michigan State University, East Lansing] <<http://h-net.msu.edu/cgi-bin/logbrowse.pl?trx=vx&list=h-1960s&month=0501&week=a&msg=W19cvLe2DCxwueNs0n2XcA&user=&pw=>> を参照。

- 34 Branch, *Parting the Waters*; Branch, *Pillar of Fire*; Garrow, *Bearing the Cross*.
- 35 "Becoming Martin Luther King, Jr.: Plagiarism and Originality," *Journal of American History* 78 (June 1991): 11-123; Marshall Frady, *Martin Luther King, Jr.* (New York: Viking, 2002); マーシャル・フレイディ著、福田敬子訳『マーティン・ルーサー・キング』岩波書店、2004年; Clayborne Carson, "A Personal Journey to Understanding Martin Luther King, Jr.," *Magazine of History* [Organization of American Historians] 19 (Jan. 2005): 4-6; Carson, "Civil Rights Reform and the Black Freedom Struggle," in *The Civil Rights Movement in America*, ed. Charles W. Eagles (Jackson: University Press of Mississippi, 1986), 19-32.

また、ジャーナリスト、伝記作家であるフレイディは、1968年にアラバマ州知事ジョージ・ウォーレスの人物伝も手がけている。この点、*Wallace* (New York: New American Library, 1968) を参照。

なお、ケネディー大統領、政権に関する修正(主義)解釈の代表としては、Thomas C. Reeves, *A Question of Character: A Life of John F. Kennedy* (New York: Free Press, 1991) や、Richard Reeves, *President Kennedy: Profile of Power* (New York: Simon and Schuster, 1993) をあげることが出来、さらに同主題における再修正(主義)解釈としては、Irving Bernstein, *Promises Kept: John F. Kennedy's New Frontier* (New York: Oxford University Press, 1991) がある。

- 36 Sitkoff, *The Struggle for Black Equality*; Branch, *Parting the Waters*; Branch, *Pillar of Fire*;

## Defining the South's Second Reconstruction

- Salmond, "My Mind Set on Freedom"; *Eyes on the Prize: America's Civil Rights Years, 1954-1965*, prod. Henry Hampton, Blackside, Boston, 1986, six videocassettes.
- 37 斎藤眞<sup>9</sup>『アメリカ政治外交史』東京大学出版会、1975年、236頁。  
1947年の「最初のフリーダム・ライド運動」については、James Peck, *Freedom Ride* (New York: Simon and Schuster, 1962); Peck, "Freedom Rides, 1947 and 1961," in *Nonviolent Direct Action, American Cases: Social Psychological Analyses*, ed. A.P. Hare and Herbert H. Blumberg (Washington, D.C.: Corpus, 1968), 49-75; August Meier and Elliot Rudwick, "The First Freedom Ride," *Phylon* 30, no. 3 (1969): 213-22 を、そしてケネディー大統領政権下における1961年の「フリーダム・ライド運動」に関しては、David Niven, *The Politics of Injustice: The Kennedys, the Freedom Rides, and the Electoral Consequences of a Moral Compromise* (Knoxville: University of Tennessee Press, 2003) をそれぞれ参照。
- 38 Linda Reed, *Simple Decency and Common Sense: The Southern Conference Movement, 1938-1963* (Bloomington: Indiana University Press, 1991); James C. Cobb, *The Most Southern Place on Earth: The Mississippi Delta and the Roots of Regional Identity* (New York: Oxford University Press, 1992); John Egerton, *Speak Now against the Day: The Generation before the Civil Rights Movement in the South* (New York: Knopf, 1994); Jane Dailey, *Before Jim Crow: The Politics of Race in Postemancipation Virginia* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2000); Fairclough, *Better Day Coming*; Clayborne Carson, David Garrow, Bill Kovach, and Carol Polsgrove, eds., *American Journalism, 1941-1963*, part 1 of *Reporting Civil Rights* (New York: Library of America, 2003).
- 39 Ellen Schrecker, ed., *Cold War Triumphalism: The Misuse of History after the Fall of Communism* (New York: New Press, 2004); Harvey Klehr, "Academy Still Uneasy with Claim of Cold War Triumph," review of *Cold War Triumphalism*, ed. by Schrecker, *Washington Times*, Washington, D.C., 19 June, 2004, consulted 10 July, 2004 <<http://www.washingtontimes.com/books/20040619-104223-6594r.htm>>; James T. Patterson, *Brown v. Board of Education: A Civil Rights Milestone and Its Troubled Legacy* (New York: Oxford University Press, 2001); Peter Irons, *Jim Crow's Children: The Broken Promise of the Brown Decision* (New York: Viking, 2002); Clayborne Carson, "Two Cheers for *Brown v. Board of Education*," *Journal of American History* 91 (June 2004): 28; Gary Orfield, "Schools More Separate: Consequences of a Decade of Resegregation," July 2001, Civil Rights Project, Harvard University, Cambridge, Massachusetts, consulted 16 Aug. 2004 <[http://www.civilrightsproject.harvard.edu/research/deseg/Schools\\_More\\_Separate.pdf](http://www.civilrightsproject.harvard.edu/research/deseg/Schools_More_Separate.pdf)>; Orfield and Chungmei Lee, "*Brown* at Fifty: King's Dream or *Plessy*'s Nightmare?," Jan. 2004, Civil Rights Project, Harvard University, consulted 16 Aug. 2004 <<http://www.civilrightsproject.harvard.edu/research/resseg04/brown50.pdf>>.

なお、かつて「人種差別の砦」を自他共に認めたミシシッピー州における、公民権運動がもたらした正、負の遺産を検証した最近の研究書としては、Kenneth T. Andrews, *Freedom Is a Constant Struggle: The Mississippi Civil Rights Movement and Its Legacy* (Chicago: University of Chicago Press, 2004); J. Todd Moye, *Let the People Decide: Black Freedom and White Resistance Movement in Sunflower County, Mississippi, 1945-1986* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2004) をあげることが出来る。

ちなみに、邦語で記された、アフーマティブ・アクション政策に関する先駆的

研究書としては、上坂昇『アメリカ黒人のジレンマ 「逆差別」という新しい人種関係』明石書店、1987年をあげることが出来る。

- 40 Robert C. Williams, *The Historian's Toolbox: A Student's Guide to the Theory and Craft of History* (Armonk, N.Y.: M.E. Sharpe, 2003), 11-12.
- 41 George W. Bush, "Remarks by the President at Grand Opening of the *Brown v. Board of Education* National Historic Site, Topeka, Kansas," 17 May 2004, White House, Washington, D.C., consulted 18 May 2004 <<http://www.whitehouse.gov/news/releases/2004/05/20040517-4.html>>; W.E.B. DuBois, *The Souls of Black Folk* (Chicago: A.C. McClurg, 1903; reprint, New York: Barnes and Noble, 2003), 16; Myrdal, *An American Dilemma*; Patterson, *Brown v. Board of Education*; Irons, *Jim Crow's Children*; Robert J. Cottrol, Raymond T. Diamond, and Leland B. Ware, *Brown v. Board of Education: Caste, Culture, and the Constitution* (Lawrence: University Press of Kansas, 2003).
- 42 Irons, *Jim Crow's Children*; Raymond Wolters, *The Burden of Brown: Thirty Years of School Desegregation* (Knoxville: University of Tennessee Press, 1984); "ABA Giving Award to Book Criticized as 'Racist': Nation Suffered from 1954 Court Decision on School Desegregation, Author Says," *Washington Post*, 5 July 1985, p. A10; "Lawyers Gather in Capital for Bar Group's Parley," *New York Times*, 6 July 1985, p. 8; David J. Garrow, "Segregation's Legacy," *Reviews in American History* [Johns Hopkins University Press] 13 (Sept. 1985): 428-32.
- 43 Michael J. Klarman, "How *Brown* Changed Race Relations: The Backlash Thesis," *Journal of American History* 81 (June 1994): 81-118; Klarman, "*Brown*, Racial Change, and the Civil Rights Movement," *Virginia Law Review* 80 (Feb. 1994): 7-150; David J. Garrow, "Hopelessly Hollow History: Revisionist Devaluing of *Brown v. Board of Education*," *Virginia Law Review* 80: 151-60; Klarman, "*Brown v. Board of Education*: Facts and Political Correctness," *Virginia Law Review* 80: 185-99.
- なおクラーマンは、それまでの自身の論考をまとめる形で、「ブラウン判決」50周年にあたる2004年の初頭に650頁から成る大著、*From Jim Crow to Civil Rights: The Supreme Court and the Struggle for Racial Equality* (New York: Oxford University Press, 2004)を書き著わした。
- 44 Alexis de Tocqueville, *Democracy in America*, 2 vols. (New York: Vintage, 1990); A・トクヴェル著、井伊玄太郎訳『アメリカの民主政治』上・中・下巻、講談社、1987年; Robert N. Bellah, Richard Madsen, William M. Sullivan, Ann Swidler, and Steven M. Tipton, *Habits of the Heart: Individualism and Commitment in American Life* (Berkeley: University of California Press, 1985); ロバート・N・ベラー他著、島園進・中村圭志訳『心の習慣 アメリカ個人主義のゆくえ』みすず書房、1991年。